

桜京古墳

— 福岡県宗像市牟田尻所在国指定史跡(装飾古墳)の史跡内容確認調査報告 —

宗像市文化財調査報告書 第58集

2007

宗像市教育委員会

sakura kyou ko fun
桜京古墳

— 福岡県宗像市牟田尻所在国指定史跡(装飾古墳)の史跡内容確認調査報告 —

宗像市文化財調査報告書 第58集



2007

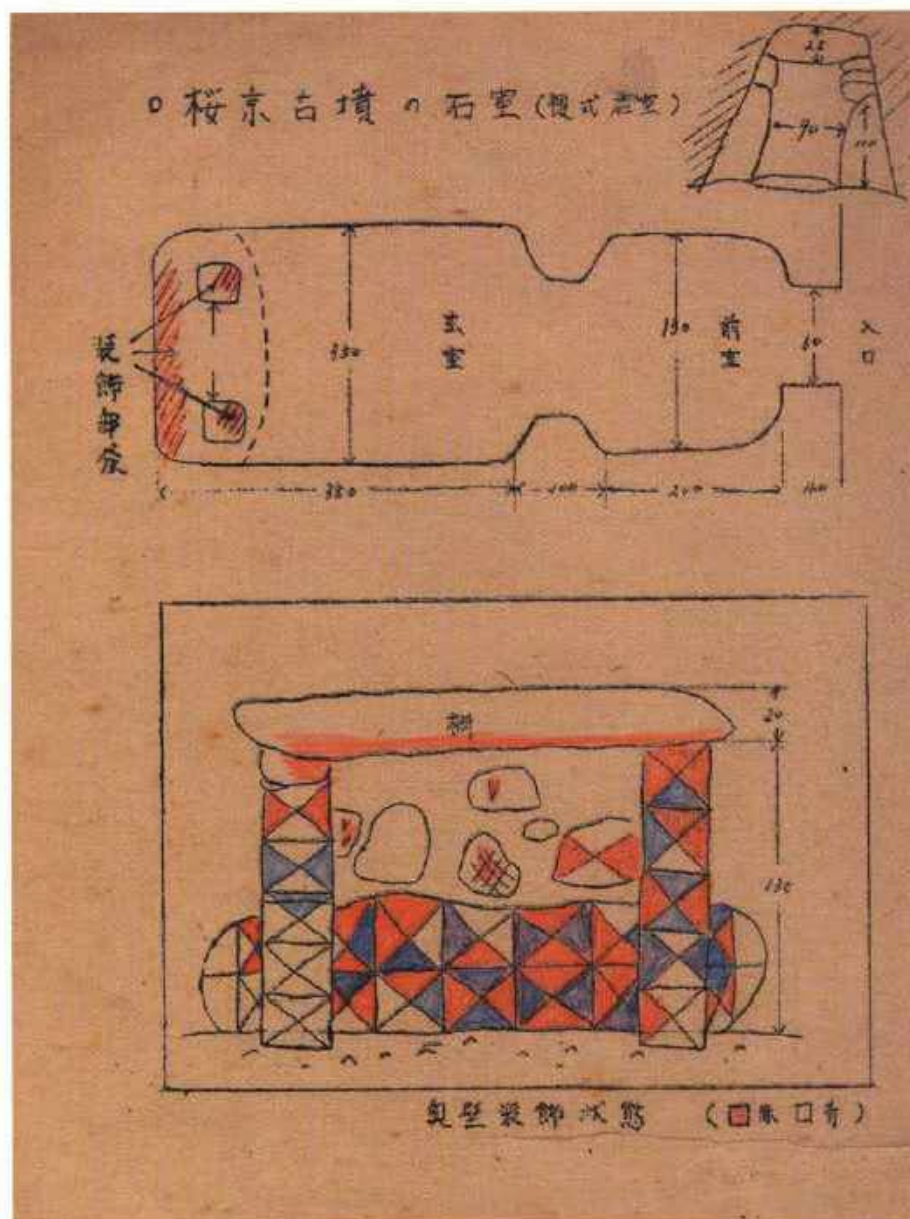
宗像市教育委員会



(1) 第1 主体部石屋形の装飾 (西から)



(2) 第1 主体部鏡石の装飾 (西から)



(1) 東海大学附属第五高等学校考古学研究会作図「桜京古墳の石室」



(2) 第1主体羨道部の敷石検出状況(西から)

序 文

平成15年4月1日、旧宗像市と旧玄海町が、さらに平成17年3月28日には旧大島村とも合併が行われ、新しい宗像市が誕生しました。歴史的にも地理的にも深い関わりがある旧大島村、旧玄海町、旧宗像市の合併は、さらなる発展への体力づくりとして期待されております。

さて、今回報告する国指定史跡「桜京古墳」は、福岡県北部では大変希少な装飾古墳として知られております。昭和46年に装飾古墳として発見され、昭和49年度に福岡県教育委員会の手によって石室内の調査などが行われておりますが、古墳の詳細な墳形、規模は今日まで不明のままでした。そこで合併を期に、平成15年度から平成17年度にかけ、現地で史跡内容確認の発掘調査を行い、本年度にその成果を報告する運びとなりました。

古墳発見の経緯についてはこれまで不詳でしたが、聞き取り調査の結果、東海大学附属第五高等学校の考古学研究会であることが明らかになり、発見者のお1人に玉稿を頂く事ができました。記して御礼申し上げます。

本書が学術研究はもとより、学校教育や生涯学習の場で活用され、また文化財保護行政に対するご理解の一助となることを願いたしますとともに、発掘調査全般にわたってご協力をいただいた多くの方々に心から感謝の意を表す次第であります。

平成19年3月30日

宗像市教育委員会

教 育 長 川 崎 雅 光

例 言

1. 本書は平成15年度から18年度にかけて国庫補助事業を受け実施した、国指定史跡「桜京古墳」(宗像市牟田尻2019番地)の史跡内容の確認調査報告書である。
2. 発掘調査は宗像市教育委員会が事業主体となって実施した。
3. 桜京古墳の福岡県文化財番号は、320168である。
4. 本報告書の遺物番号は挿図や遺構番号に関わらず、すべて通し番号である。
5. 遺構の名称は次のように記号化した。
SO:古墳 SK:土坑 SP:柱穴、小穴 SD:溝状遺構 SX:不明遺構
6. 数字、アルファベットが記載された土層の色調は、下記の土色帖を使用した。
『新版 標準土色帖』2001年前期版
農林水産省農林技術会議事務局 監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修
7. 基準点測量は(有)三田測量に委託した。座標は旧来の日本系座標値を用いている。方位はすべて磁北である。
8. 水準点は、福岡県教育委員会の行った昭和49年度調査の測量図と異なっていたが、今回の数値を正としており、石室実測図の標高も修正している。(正水準点は旧水準点の+1.447 m)
9. 現地での発掘作業は地元有志の協力を得た。
10. 遺構実測図、平板測量図は白木英敏、坂本佳代子、岡本格、原田恭行が主に行った。
11. 遺物の実測は岡本格が行った。
12. トレンチおよび遺構写真の撮影は白木が、遺物写真の撮影は白木が行った。
13. 遺構、遺物の製図は中原美知子が、遺物の整理は西村広子、田代貞子、田崎結子、東和子、濱田広美、浅倉弥生、田島圭伊子が行った。
14. 遺物の計測値、所見の詳細は、表を参照されたい。
15. 本書の執筆は「第1章4.発見の経緯」を鎌田隆徳氏(河東小学校教頭)が、その他の執筆及び編集は、白木が行った。
16. 本調査において出土した遺物および実測図、写真等の資料は、宗像市教育委員会(市民活動推進課)で保管している。第1主体部に関する実測図(第16・17図)については福岡県立九州歴史資料館で保管している。

目 次

第1章 序 説	1
1. 経過	1
2. 組織と構成	2
3. 位置と環境	3
4. 発見の経緯	3
5. 調査の概要	5
第2章 調査の記録	7
1. 墳丘の調査	7
2. 第2主体部の調査	9
第3章 ま と め	10
1. 調査のまとめ	10
2. 第1主体部について	10
3. 装飾について	11

插图目次

第1図 桜京古墳周辺の遺跡分布地図 (1/25,000)	6
第2図 桜京古墳周辺の古墳分布地図 (1/5,000)	14
第3図 桜京古墳の現況測量図 (1/300)	15
第4図 桜京古墳の墳丘断面図 (1/300)	16
第5図 桜京古墳のトレンチ配置図及び公有地範囲図 (1/300)	17
第6図 桜京古墳の墳丘復元図 (1/300)	18
第7図 第1・2トレンチ実測図 (1/40)	19
第8図 第3トレンチ実測図 (1/40)	20
第9図 第4トレンチ実測図 (1/40)	21
第10図 第5・6トレンチ実測図 (1/40)	22
第11図 第7・8トレンチ実測図 (1/40)	23
第12図 第2主体部現況実測図 (1/40)	24
第13図 各トレンチ出土遺物実測図① (1/3・1/2・1/1)	25
第14図 各トレンチ出土遺物実測図② (1/3・1/1)	26

第15図	各トレンチ出土遺物及び表面採集遺物実測図③ (1/3)	27
第16図	第1主体部石屋形の装飾実測図 (1/16)	28
第17図	第1主体部実測図 (1/40) 折込み	29・30

表 目 次

表	桜京古墳トレンチ他出土遺物観察表	12
---	------------------------	----

図版目次

巻頭カラー図版1 (1) 第1主体部石屋形の装飾(西から) (2) 第1主体部鏡石の装飾(西から)

巻頭カラー図版2 (1) 東海大学附属第五高等学校考古学研究会作図「桜京古墳の石室」

(2) 第1主体羨道部の敷石検出状況(第3トレンチ・北から)

図版1	(1) 第2主体部発見時の状況(西から)	(2) 第2主体部清掃後(西から)
図版2	(1) 前方部より後円部を望む(南から)	(2) 後円部より前方部を望む(北から)
	(3) 里道から前方部を望む(東から)	(4) 前方部墳裾(西から)
	(5) 墳丘東側面(前方部南東隅から)	(6) 墳丘西側面(後円部北西端から)
	(7) 第1主体部入口の仮密閉状況(西から)	(8) 牟田尻桜京A-12号墳(北から)
図版3	(1) 牟田尻桜京A-12号墳盗掘坑(西から)	(2) 牟田尻桜京B-03号墳(東から)
	(3) 第1トレンチ完掘状況(南から)	(4) 第1トレンチ東壁土層(西から)
	(5) 第1トレンチ西壁土層(東から)	
図版4	(1) 第2トレンチ完掘状況(北から)	(2) 第2トレンチ西壁土層(東から)
	(3) 第2トレンチ東壁土層(西から)	(4) 第2トレンチ南壁土層(北から)
	(5) 第3トレンチ完掘状況(南から)	
図版5	(1) 第3トレンチ完掘状況(西から)	(2) 第3トレンチ南壁土層(北から)
	(3) 第3トレンチ第2主体部推定墓道東及び南壁土層(北西から)	
	(4) 第3トレンチ第2主体部推定墓道検出状況(西から)	
	(5) 第4トレンチ第1主体羨道部の敷石検出状況(南から)	
図版6	(1) 第4トレンチ完掘状況(西から)	(2) 第4トレンチ完掘状況(東から)
	(3) 第5トレンチ完掘状況(南から)	(4) 第5トレンチ北壁土層(南から)
	(5) 第5トレンチ東壁土層(西から)	(6) 第5トレンチ東壁土層拡大(西から)
	(7) 第6トレンチ完掘状況(北東から)	(8) 第6トレンチ南及び西壁土層(東から)
図版7	(1) 第7トレンチ括れ部検出状況(西から)	(2) 第7トレンチ括れ部検出状況(南から)
	(3) 第8トレンチ完掘状況(西から)	(4) 第8トレンチ遺物出土状況(西から)
	(5) 第8トレンチ北壁土層(南から)	
図版8	各トレンチ出土遺物及び表面採集遺物	

第1章 序 説

1. 経過

1) 調査に至る経過

桜京古墳は昭和46年10月23日、東海大学附属第五高等学校考古学研究会が行っていた遺跡分布調査中に装飾古墳として発見された。昭和49年度に福岡県教育委員会が主体となり、墳丘測量（昭和49年12月23～27日）及び石室清掃・石室実測（昭和50年1月5～8日・同年7月8日に補測）等を行い、調査後は土のうで羨道部を仮密閉した。昭和51年3月31日に国指定史跡として保存され、52年度には墳丘部分の893㎡を公有化した。今日まで公開や活用、調査などは行われておらず、現地に至る里道なども未整備のため見学者に不便を来していた。

平成15年4月1日、古墳の所在する旧玄海町と旧宗像市が新設合併し、宗像大社、鎮国寺や神湊、鐘崎などの海浜部から大島、沖ノ島などの離島まで含めたエリアを新しい宗像市の歴史・観光拠点と位置付けられることになった。国指定史跡である桜京古墳もその中核をなす重要遺跡として、装飾についての十分な保存処置や公開などの活用を念頭に入れた史跡整備が求められることになった。

そこで国庫補助事業として平成15年度から平成18年度までの4ヶ年をかけ、墳丘規模・墳形など史跡内容を確認する目的で、墳丘および周辺の平板測量やトレンチ調査、さらに今回の報告書作成を行い、史跡整備へ向けた第1歩を踏み出すことになった。

2) 調査の経過

平成15年度：現地調査を平成15年8月1日から10月30日にかけて行った。まずは丘陵下にある作業員用仮駐車場地から古墳へと至る里道および墳丘の竹木伐採等を行い、作業及び見学可能な状態に清掃した。その後、墳丘及び周辺の平板測量図の作成を行い、墳丘全長の確認を目的として、墳丘主軸上の前方部（第1トレンチ）及び後円部（第2トレンチ）にトレンチを設定し、掘り下げを行った。調査後に埋土は篩いをかけ、慎重に埋め戻した。平成15年11月4日から平成16年2月27日にかけて、写真・図面や出土遺物洗浄などの資料整理を行った後、平成16年3月1日から3月25日にかけて実績報告書を作成し本年度の調査を終了した。

平成16年度：現地調査を平成16年11月1日から平成17年3月31日にかけて行った。墳丘の清掃後、墳丘西側括れ部の確認を目的として、西側括れ部と推定される付近に第3トレンチを設定し、掘り下げを行った。平成16年12月15日清野孝之文化庁文部科学技官及び福岡県教育庁文化財保護課と現地へ赴き、調査計画や今後の調査整備等について調査指導を受ける。平板測量は墳丘東側周辺を追加した。調査後に埋土は篩いをかけ、慎重に埋め戻した。平成17年2月1日から3月31日にかけて、写真・図面や出土遺物洗浄などの資料整理を行うとともに、平成17年3月1日から3月31日にかけて実績報告書を作成し本年度の調査を終了した。

平成17年度：現地調査を平成17年7月4日から平成18年1月31日にかけて行った。墳丘の清掃後、墳丘及び周辺の平板測量図の作成を行い、主体部墓道（第4トレンチ）、前方部西コーナー（第5トレンチ）、後円部北東墳裾（第6トレンチ）、東側括れ部（第7トレンチ）の確認を目的としたトレンチを設定し、掘り下げを行った。調査後に埋土は篩いをかけ、慎重に埋め戻した。平成17年12月1日から平成18年2月28日にかけて、写真・図面や出土遺物洗浄などの資料整理を行った後、平成18年3月1日から3月31日にかけて実績報告書を作成し本年度の調査を終了した。

平成18年度：報告書作成を行った。平成18年6月1日から同年9月29日にかけて遺物実測図、遺構

実測図など図面類を作成し、清書作業を経て挿図完成後、図面・写真類の整理、台帳化を行った。

文化財保護法にかかる手続き

史跡現状変更許可申請書	平成15年6月24日付15宗教生第437号（H15年度） 平成16年8月2日付16宗教生第558号（H16年度） 平成17年5月20日付17宗教教第231号（H17年度）
埋蔵物発見届	平成16年3月31日付14宗教生第1198号（H15年度） 平成17年4月7日付17宗教教第4号（H16年度） 平成18年3月27日付17宗教教第1373号（H17年度）
埋蔵文化財保管証	平成16年3月31日付14宗教生第1199号（H15年度） 平成17年4月8日付17宗教教第33号（H16年度） 平成18年3月27日付17宗教教第1374号（H17年度）
史跡現状変更終了報告書	平成16年3月30日付宗教生第1586号（H15年度） 平成17年3月18日付宗教生第1362号（H16年度） 平成18年3月31日付宗教教第1410号（H17年度）

2. 組織と構成

1) 平成15年度発掘調査組織

総括	宗像市教育委員会	教育長	川崎 雅光
		教育部長	城月カヨ子
		生涯学習課長	伊豆丸正敏
		文化財係長	原 俊一
庶務・会計		同上	原 俊一
発掘調査担当		主任技師	白木 英敏
		囑託	佐野 恵美（旧姓吉田）

2) 平成16年度発掘調査作成組織

総括	宗像市教育委員会	教育長	川崎 雅光
		教育部長	城月カヨ子
		生涯学習課長	谷口 敏文
		文化財係長	原 俊一
庶務・会計		主任主事	安部 一三
発掘調査担当		主任技師	白木 英敏
		囑託	坂本佳代子
調査指導	文化庁	文部科学技官	清野 孝之
	福岡県教育庁総務部文化財保護課		新原 正典
	同上		伊崎 俊秋
	同上		重藤 輝行

3) 平成17年度発掘調査組織

総括	宗像市教育委員会	教育長	川崎 雅光
		市民協働部長	藤野 英美
		市民活動推進課長	城野 國広
		文化・スポーツ推進係長	横山 弘道
庶務・会計		主任主査	安部 裕久
発掘調査担当		主査	白木 英敏

4) 平成18年度報告書作成組織

総括	宗像市教育委員会	教育長	川崎 雅光
		市民協働部長	藤野 英美
		市民活動推進課長	吉田 伸広
		文化・スポーツ推進係長	佐藤 久光
庶務・会計		主任技師	岡 崇
報告書作成担当		主査	白木 英敏

最後になりましたが、昭和49年度に行われた福岡県教育委員会の調査内容については九州歴史資料館 石山勲氏にご教示頂きました。また桜京古墳発見者のお1人、河東小学校教頭 鎌田隆徳教諭には発見の経緯についての玉稿を頂きました。心より感謝申し上げます。

3. 位置と環境

桜京古墳は、宗像市の西沿岸部に位置し、釣川下流左岸の玄界灘を望む丘陵上、標高50mほどに立地する装飾古墳で、約200基からなる牟田尻古墳群の一支群、牟田尻桜京古墳群に含まれる。同丘陵上からは、空気のよく澄んだ天候の良い日にだけ、意外なほど大きく見える小呂島（福岡市西区）を認めることができる。

本古墳の立地する丘陵の西側一帯は、ゴルフ場開発に伴い平成8年度に古墳群の発掘調査が行われ、5世紀中頃～7世紀にかけて営まれた古墳群の内容が明らかになった。金銅製飾履や鉄製戟、鉄製アワビオコシ、銅鈴などの重要遺物が出土している。また、近隣の神湊地区では古墳時代の大規模な海人集落遺跡と目されている浜宮貝塚、古墳時代や古代の製塩土器が採集された神湊上方（A・B）遺跡、前方後円墳含む神湊上野古墳群など分布している。

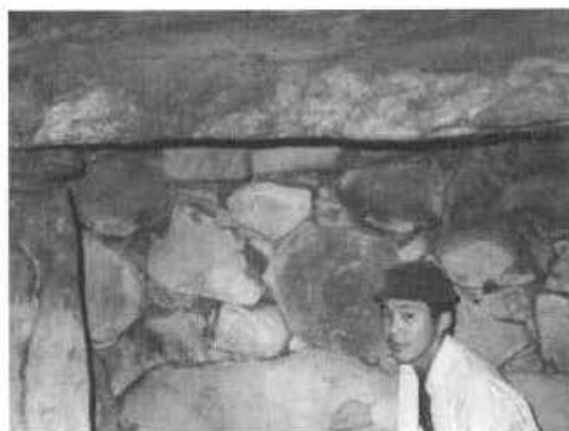
これまでのところ、神湊および牟田尻地区だけで前方後円墳が5基確認されている。無論、宗像君一族の奥津城である津屋崎古墳群（福津市）ほど大きなものはないが、彼等首長層を支え、あるいは牽制した有力海人集団の長が眠るものと考えられよう。

4. 発見の経緯

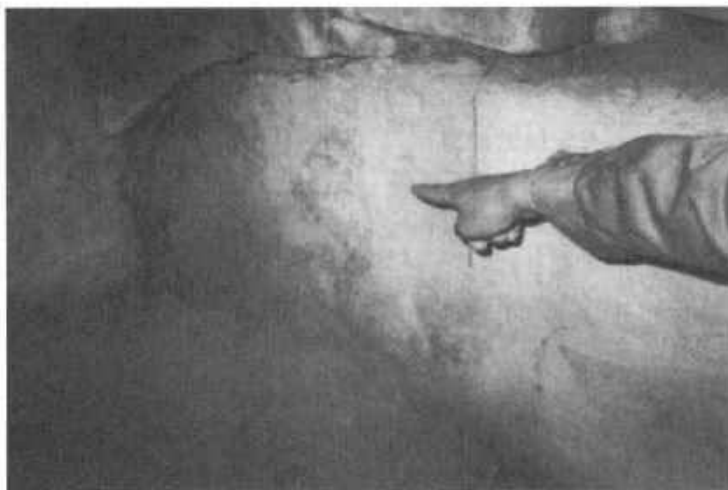
昭和45年10月、この年結成された東海大学附属第五高校の考古学研究会は、宗像郡内の遺跡分布図づくりのため、旧宗像町や旧玄海町、旧津屋崎町の山に入り古墳を中心とした遺跡の分布調査をおこなっていた。

昭和46年4月から牟田尻地区の西方の丘陵に点在する古墳群の分布調査を数回にわたっておこなう。そして、丘陵の尾根上に60基以上の円墳がいくつかのグループを成して分布していることや石室が開口し玄室に石屋形が設けられた前方後円墳と墳頂部が陥没した前方後円墳の2基を確認する。（その後の調査で確認できた93基の古墳の分布状況は、当時福岡県教育委員会でおこなわれていた「市町村別遺跡等分布地図」作成の資料として旧玄海町教育委員会に報告し、台帳に収録される）

同年10月23日、秋山 勇夫教諭、高岡 清教諭、生徒の花田勝広、鎌田隆徳の4名が11月



装飾発見時の写真①



装飾発見時の写真②



装飾発見時の写真③

に予定されている学園祭で「宗像の遺跡」の展示発表をするため、石室が開口している前方後円墳の石室内に入り、写真撮影と計測をおこなう。その時に玄室石室形の奥壁の一枚石と石柵を支える2本の石柱に、三角文の線刻と青や赤等で彩色が施されていることを発見する。

後日、再度、石室内に入り、玄室の三角文の線刻や装飾の範囲や状態を調べ、図面にとる。(巻頭カラー図版2参照)

11月の学園祭において、宗像で初めて発見された装飾古墳として原寸大の石室の模型を作成し、展示発表する。期間中には宗像高校郷土部顧問の正木喜三郎先生が来校し見学される。

昭和47年4月、福岡教育大学歴史研究会考古学班による宗像地区の遺跡巡検がおこなわれる。第五高校考古学研究会の花田、鎌田が参加して、装飾古墳の存在を知らせ、同古墳へ案内する。

後日、教育大学歴史研究会が福岡県教育委員会文化課へ連絡、県教育委員会文化課松岡史技術主査が玄海町教育委員会とともに現地入りし、装飾古墳であることの確認がされる。

また、古墳の所在地は地元の字名で桜京（さくらきょう）といい、桜京古墳と名づけられ、県教育委員会から文化庁に国指定史跡への申請がなされる。

9月、朝日新聞、西日本新聞、毎日新聞の各紙にて「沿岸部に装飾古墳」「福岡県北端で初めて」の発見として報道がなされる。

昭和49年度には福岡県教育委員会が石室内外の調査を行い、昭和51年3月31日に国指定史跡となる。



(朝日新聞)



(西日本新聞)

当時の新聞記事

以上が発見当時の経緯である。

さて、地元(牟田尻地区)では、牟田尻から勝浦の山に数多く点在する古墳のことを「塚」と呼ばれていた。そして、古墳の開口した石室や墳頂部が陥没した穴を見て「山賊が住んでいた穴」とか「爆弾が落ちた跡」などとも言われていた。

貝原益軒の『筑前國續風土記』(註1)には、「此村の西の山に、人の住し窟有。下より顯れ見ゆ。凡大小廿許、・・・」とあり、筑前國續風土記拾遺(註2)にも「村の西小山の中に石窟あり。本編に廿六ヶ所有といへり。今は崩れて唯一ッ残れり。入口は狭く長し。其廊の如き處、長さ壹丈顯れ五尺、奥横七尺、入壹丈壹尺五寸。又其奥に高さ四尺、入貳尺八寸計の所有。其前に大石の棚あり。穴の口は西に向きたり。・・・」ともある。石室を利用して人が住んでいたことや桜京古墳と思われる古墳の石室の大きさも記されている。

また、桜京古墳の石室内に「寛文拾参年五月□日」や「昭和十三年」の釘書きがある。また、昭和20年代には石室の中で地元の人達で賭博がおこなわれていたという。

このように桜京古墳は、少なくとも江戸時代の頃には石室部は開口していて、石室内への人の出入りがなされていたことがわかる。その当時、石室に施されていた線刻や装飾については気づかれていたとも考えられる。しかし、誰からも気に留められることもなく、歴史的な価値の知られるすべもなかった。東海大学附属第五高校考古学研究会によって発見されるまで、桜京古墳の存在は忘れ去られていたのである。

註

(1) 貝原益軒編『筑前國續風土記』牟田尻村 『宗像郡誌』上巻 1944

(2) 青柳種信編『筑前國續風土記拾遺』牟田尻村 『宗像郡誌』上巻 1944

5. 調査の概要

現況測量 墳丘測量図は昭和49年福岡県教育委員会調査では50cmコンタであったものを25cmで測り直した。測量中に西側括れ部付近で小振りな横穴式石室と考えられる第2主体部を発見している。さらに墳丘はほとんど崩れているが、前方部南東部の斜面で新たな古墳(円墳)を確認した。

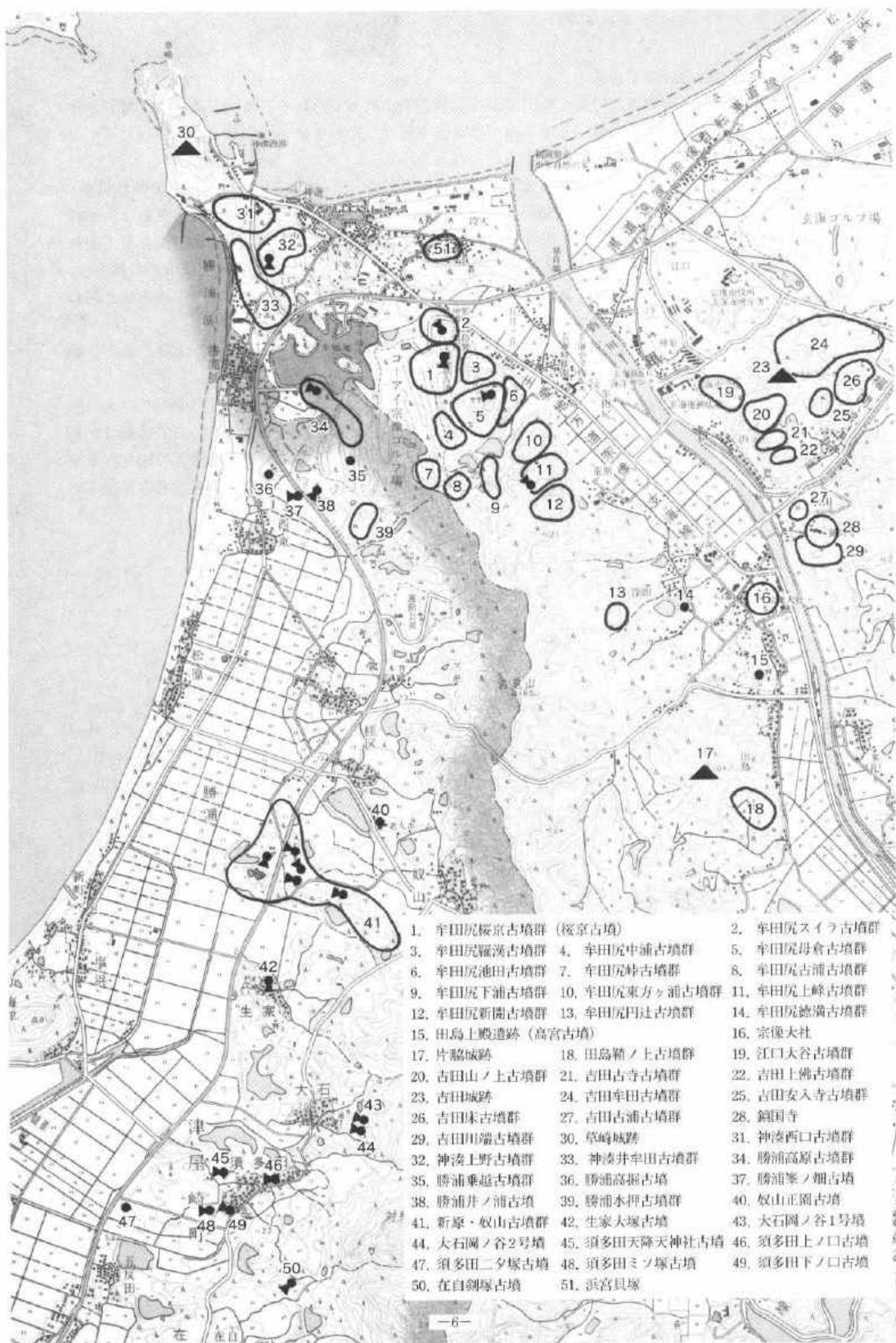
墳形 主軸方位をほぼ南北(N-10°-E)にとる前方後円墳である。痩せ尾根上という立地の制約のためであろう、前方部西側は比較的旧状を保っている前方部東側と対称にならず、柄鏡状のあまり開かない形状に考えられる。また、墳丘は大半が盛土によるものである。

墳丘規模 トレンチによる墳丘調査の結果、墳丘規模は、墳丘全長39.0m、後円部径24.0m、後円部高6.4m(現況)、括れ部幅11.0m、前方部幅13.5m、前方部高4.0m(現況)、前方部長16.0mに推定される。

第1主体部 今回調査は行っていないが、昭和49年度福岡県教育委員会調査の実測図をもとに計測値等を提示しておく。

主体部は複室構造の横穴式石室で、墳丘主軸にほぼ直交して西側に開口する。石室全長8.86m、羨道部長5.09m、前室長2.58m、中央部幅1.47m、高さ1.96m、後室長3.88m、奥壁幅2.05m、中央幅2.29m、手前幅2.20m、高さ3.63mを測る。奥壁に造られた石屋形は、石棚の両側を2本の石柱で形式的に支えるタイプである。石棚の高さは中央先端部で1.65m、奥壁側1.72m、石柱の間隔(内側)は約1.2mを測る。

第2主体部 平成15年度に墳丘の平板測量中に発見した。石塊が落ち葉から顔を出しており、小振りだが天井石を構成する石材と見られる。石材下に石組みが見られることから小形の横穴式石室と考え、第2主体部に認定した。開口部からスタッフを差し込んでみたところ天井石の端部から1.34mで石材に突き当たった。平成16年度に文化庁技官及び福岡県文化財保護課との協議により、内部調査は今回行わないことになったため、平成17年度に現況実測のみ行った。



第1図 桜京古墳周辺の遺跡分布地図 (1/25,000)

第2章 調査の記録

1. 墳丘の調査

1) 第1トレンチ

トレンチの設定 (第5図)

墳丘全長を明らかにするため、前方部端部に幅1 m×長さ2.7 mのトレンチを設定した。主軸は昭和49年の福岡県教育委員会による調査で設定したラインで問題ないと考え、今回も踏襲することにした。後円部頂及び前方部上に残されたプラスチック杭を墳丘清掃中に確認できたため、それを基準として新たにプラスチック杭を設定した。

調査の内容 (第7・13図・図版3・8)

地山整形面の上に褐色系の整地土を35 cmほど施し、その上に約20 cmの黒褐色の旧表土層が堆積しているが、その上層は開墾による軟質の攪乱土である。西壁土層では溝状の堆積が観察できるがA-12号墳との間の丘陵尾根切断部であり周溝ではない。丘陵尾根切断の地形変換点が前方部墳裾と考えられる。A-12号墳との先後関係は土層からは不明である。

出土遺物 (001・002) 001は須恵器甕の胴部片であろう。002は土師器小皿で口縁端部を僅かに欠く。復元底径8.4 cm、残存高1.9 cmを測る。底部には回転糸切り痕が残る。

2) 第2トレンチ

トレンチの設定 (第5図)

墳丘全長を明らかにするため、後円部端部に幅1 m×長さ2 mのトレンチを設定した。

調査の内容 (第7・13図・図版4・8)

段築なく一気に盛り上げているため、盛土は流出していたが、トレンチ南端で地山直上に形成された旧表土を検出した。後円部のすぐ北側から谷部にかけて細長い棚田状に造成されていることもあり、墳裾は明確にできなかった。

出土遺物 (003・004) いずれも土師器である。004は高坏の屈曲部片であろう。

3) 第3トレンチ

トレンチの設定 (第5図)

西側括れ部の確認を目的にトレンチを設定した。トレンチ規模は数回の拡張を繰り返し、最終的には幅2.9 m×長さ4.9 mとなった。墳丘西側は東側に比べ削平著しく、また括れ部と目される地点には大木が存在しており、西側括れ部検出には困難が予想された。

調査の内容 (第8・13図・図版4・5・8)

予想に違わず墳丘基底面より深い削平が行われていたが、トレンチ南端で第2主体部の墓道と考えられる遺構を検出した。トレンチ東端の一部を0.3 mほど掘り下げたが未掘のままである。時期不詳だが遺構と見られるものはSP1のみで他は木根などの攪乱である。SX1も木根などの攪乱だが、その表面付近から白玉1点出土した。トレンチ南東隅は自然地形による谷側への落ち込みである。

出土遺物 (005) 005は白玉である。側面に稜線をつくり、5世紀代によく見られる形状で、本古墳に伴う可能性は低いと考えている。直径0.43 cm、厚さ0.28 cmを測る。

4) 第4トレンチ

トレンチの設定 (第5図)

墓道の確認を目的に幅2 m、長さ4 mのトレンチを設定した。トレンチ中央部には羨道部の天井石であったと見られる長さ1.5 m、幅0.7 m、厚さ0.45 mほどの大石が露出していた。また、規模ははっきりしないがトレンチの北側にも大振りの石材が露出している。

調査の内容 (第9・13図・図版5・6・8)

埋土は、地山直上に後円部西側が削平された時の攪乱土が0.5 mほど、その上には県教育委員会調査時に行われた石室清掃の排土が最大35 cmほど堆積していた。トレンチ床面には掘り込みを3基検出したが、攪乱土とほぼ同質の埋土であり、何れも遺構ではないと考えられる。また、トレンチ内には羨道の開口部付近を構築していたと見られる石材が散在していたが、東壁では原位置を保つ羨道部側壁の石材、床面には敷石の一部を検出した。なお、石室実測調査時の測量ポイント(釘)を確認しており、石室位置を正確に測り込むことができた。

出土遺物 (006～026) 削平時の攪乱土や石室清掃の排土からの出土である。土器類では須恵器ハソウ片(006～008)や器台片(010・011)などが出土している。金属器は鉄鎌茎(019)・弓金具(021)が古墳時代のもの、020は鉄銭、銅銭には「寛永通寶」や1368年初鑄の明銭「洪武通寶」がある。

5) 第5トレンチ

トレンチの設定 (第5図)

前方部南西隅の確認を目的に幅2.9 m×長さ3.4 mのトレンチを設定した。墳丘西側は削平著しく、前方部南西隅付近も現況ではほぼ平坦面である。

調査の内容 (第10・14図・図版6・8)

トレンチ東壁土層では地山整形面の上に褐色系の整地土を10～20 cmほど施し、その上に約15～20 cmの黒褐色の旧表土層が堆積しているが、その上層は開墾による軟質の攪乱土である。若干削平されている可能性もあるが、これら土層が接する地点が第1トレンチの状況から見て前方部端であろう。北壁土層は東壁土層の延長で、西側墳裾はこれら土層の地山に接する地点とも思えるが、攪乱土層が直上を覆っており若干の削平を受けているようだ。なお、自然地形である谷部への落ち込みが西側約0.7 mから始まるなど、地形的な制約もあることから、東側のように大きく開く前方部になるとは考えられない。

出土遺物 (027～030) 027は甕の口縁部片である。口縁部下に細かな波状文が施され、全体に鋭さが残るつくりである。030はコバルトブルーを呈するガラス小玉である。

6) 第6トレンチ

トレンチの設定 (第5図)

第2トレンチで判然としなかった後円部墳裾を主軸以外で確認する目的で、比較的墳丘の残存状況が良いと思われた後円部北東に幅1 m×長さ4 mのトレンチを設定した。

調査の内容 (第10・14図・図版6・8)

トレンチ南西壁ではやや大雑把な盛土の状況が観察できた。旧表土は他のトレンチとは違い、地山直上に堆積している。墳丘盛土はここでも流出していたが、地形変換点を墳裾と認定した。

出土遺物 (031～036) 031・032は須恵器坏身である。031は本調査で唯一の図面復元できた坏身である。復元口径12.8 cm、器高4.6 cm、復元受部径15.0 cmを測る。小田編年Ⅲ B期。033は小壺状

だが装飾器台などの子持ち部分の破片か。034は土師器高坏で坏部の下半に不整形な突起を持つ。口径8.0cm、坏部高5.3cm、基部径4.4cmを測る。

7) 第7トレンチ

トレンチの設定 (第5図)

第3トレンチでは判然としなかった括れ部の確認を目的に東側括れ部付近に幅2.5m×長さ3mのトレンチを設定した。ここでも括れ部と目される地点には大木が存在しており、西側括れ部同様、検出には困難が予想された。

調査の内容 (第11・14図・図版7・8)

大木のほか風倒木の痕跡と見られる凹みがあり調査は難航したが、トレンチ南東隅で東側括れ部と考えられる地山整形を検出できた。

出土遺物 (037～042) 037は須恵器坏身片、他は土師器である。040器台の脚部片である。041は高坏脚基部・042は高坏の坏部片である。

8) 第8トレンチ

トレンチの設定 (第5図)

第2トレンチで判然としなかった後円部墳裾を主軸以外で確認することを目的とした。墳丘西側は削平が著しいが、墳裾の遺存状況が比較的期待できる後円部北西に幅1m×長さ3.2mのトレンチを設定した。

調査の内容 (第11・15図・図版7・8)

削平が著しく墳裾の痕跡は確認できなかった。トレンチ北側ではテラス状に地山が残っていたが軟質の攪乱土が地山直上を覆っており、整形面とは言えない。トレンチ北西端に自然地形である西側谷部への落ち込みを検出しており、墳裾の北西限といえる。

出土遺物 (043～049) すべて須恵器である。043は高坏の基部で長方形スカシが残存する。044は器種不明だが器台か。スカシ孔が上面に残存する。045～049は甕である。

2. 第2主体部の調査

1) 発見の経緯

平成15年度に墳丘の平板測量を行っていたところ、西側括れ部に入頭大の石塊が落ち葉の下から顔を覗かせているのに気付いた。腐葉土を取り除くと石塊の下は空洞となっており、石室の可能性が高いと思われた。文化庁技官及び福岡県文化財保護課との協議の結果、内部調査は今回行わないことになったため、平成17年度に現況実測のみ行った。

2) 調査内容 (第12図・図版1)

石塊はピンボールによるボーリング調査では幅0.8～1m、奥行き約0.45cm、断面三角形を呈する。小振りだが天井石を構成する石材と見られる。土砂が大量に流れ込んでいるが、覗き込んでみると両側壁は持ち送りで積み上げており、天井石に接する部分の間隔は13cmとかなり狭い。奥壁は不詳だが、スタッフを差し込んでみたところ天井石の端部から1.34mで石材に突き当たった。小形の横穴式石室と考えており、第2主体部に認定した。西側の前方部から括れ部付近は開墾による整形が著しく、この開墾時に第2主体部が露呈した可能性もあろう。

第3章 まとめ

1) 調査のまとめ

墳形は、主軸方位をほぼ南北(N-10°-E)にとる前方後円墳である。瘦せ尾根上という立地の制約のためであろう、前方部西側は比較的旧状を保っている前方部東側と対称にならず、柄鏡状のあまり開かない形状に考えられる。後円部は前方部に比してかなりボリュームがあるのも形態的特長である。

前方部、後円部とも段築はなく、一気に墳丘を盛り上げている。また、墳丘は大半が盛土によるものであることが確認された。低位の前方部側に設定した第1トレンチの土層観察によると、一旦整形された地山面に0.4 mほど整地土を敷いてカサ上げし、旧表土はその上に形成されている。盛土を積み上げる前の整形面をできるだけ水平にする意図があったものと考えられる。周辺施設としての周溝、埴輪、葺石などは確認されなかった。

墳丘規模は、トレンチによる墳丘調査の結果、墳丘全長39.0 m、後円部径24.0 m、後円部高6.4 m(現況)、括れ部幅11.0 m、前方部幅13.5 m、前方部高4.0 m(現況)、前方部長16.0 mに推定される。

第2主体部は、墳丘測量図は昭和49年福岡県教育委員会調査では50 cmコンタであったものを25 cmで測り直した。測量中に西側括れ部付近で小振りな横穴式石室と考えられる第2主体部を発見している。さらに墳丘はほとんど崩れているが、前方部南東部に新たな古墳(円墳)を確認した。

今後、第1及び第2主体部の調査や装飾石室の保存・公開が期待されるが、その前提となる石室内部環境の調査も急務であろう。また墳丘部分のみ公有化がなされているものの、墳丘復元の結果、若干公有地をはみ出す部分もあり、整備を考えれば不十分である。指定範囲の追加や公有化の推進など多くの課題が残されている。

2) 第1主体部について(第17図)

今後の整備計画を策定する上で、昭和49年度福岡県教育委員会が行った主体部調査の成果は欠かせないため、ここで概要を記載しておきたい。

第1主体部(註1)は複室構造の横穴式石室で、後室に石屋形を造る。開口方向は墳丘主軸にほぼ直交して西側(N-73°-W)である。計測値は、石室全長8.86 m、羨道部長5.09 m、前室長2.58 m、中央部幅1.47 m、高さ1.96 m、後室長3.88 m、奥壁幅2.05 m、中央幅2.29 m、手前幅2.20 m、高さ3.63 mを測る。石屋形は、石棚部の高さが中央先端部で1.65 m、奥壁側1.72 m、石柱は露出部からの現況高が右側1.72 m、左側1.46 mとやや短いため上端部に板石をはめ込み、高さを合わせている。石柱の間隔(内側)は約1.2 mを測る。

前室プランは右側壁がやや丸みを帯びるがほぼ長方形、後室プランは奥壁側が僅かに狭まるがほぼ長方形で狭長な印象を受ける。後室立面形は腰石の位置が低く、そこから大きく持ち送って、高い天井を構築する、いわゆるスペットウタイプの横穴式石室である(註2)。

また特筆すべきは後室奥壁に造られた石屋形とそこに施された装飾である。石屋形は、板石を石室壁体に組み込んだ石棚を石柱で形式的に支える構造である。九州全域で石屋形は40例を数えるが、このようなタイプは12例存在する(註3)。

また、前室入口の第1框石と後室入口の第2框石まではスロープになっており、框石上面の比高差は0.55 mとかなりある。

石材は、玄武岩の柱状節理が多用されており、その小口積みは蜂の巣状に整った印象を受ける。石屋形の両石柱も玄武岩柱状節理を用いている。

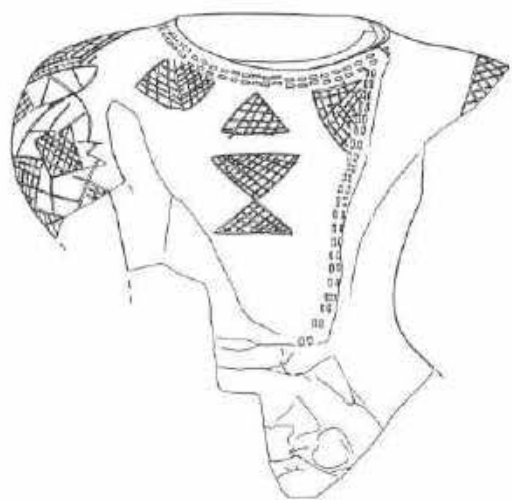
3) 装飾について (第16図)

装飾は、奥壁鏡石のほぼ全面とその上に積まれた石材の一部及び石柱前面から内側面にかけて描かれている。文様は沈線で区画された三角文のみの幾何学文様で構成され、赤・緑・黄の3色で塗り分けられ、装飾古墳としては多色に属する。しかしながら沈線の重複する部分や、彩色が沈線の区画をはみ出す部分、沈線を施さず彩色する部分もあり、整然としているとはいえない。

さて、本古墳の特徴のひとつである三角文のみの文様構成について気付いた事を記しておきたい。かつて金関丈夫は「むなかた」という小文(註4)の中で、宗像の名は「北九州の宗像は、もとは胥形と書かれた。胸に鱗形の入墨をした海部の子孫、これが北九州のムナカタ氏である。」と述べ、宗像の名称由来について地形発生説と並ぶ有力説として注目されていた。

辰巳和弘は、埼玉県大宮市東宮下出土の男子人物埴輪半身像の胸に線刻された不整楕円の中を連続三角文で充填した特異な文様は鱗文を表現したものと考え、金関丈夫の海人の統率者であるムナカタという氏の名称が胸に入墨をしていたところに由来するとみる金関説を成り立ちうるとした上で、八女市立山山13号墳出土人物埴輪(註5)の衣服にみられる三角形の頂点を接した向い鱗文と、その上の三角形(鱗文)で構成された文様こそ「むなかた」とであると結論付けた(註6)。

そのような視点で桜京古墳の文様を見れば、まさに鱗文の集合体であり、他の例を引くまでもなく、ムナカタ海人集団の本拠地での「むなかた」と理解できよう。集団の証しである鱗文(三角文)のみの文様構成は、ことさら他の文様を必要とせず、さらに想像を逞しくすれば鏡石の装飾は胸部、石柱は肩、腕に見立てることも可能であろう。海を舞台に活躍した海人集団、宗像氏や安曇氏などの本拠地、北部九州沿岸部で「むなかた」や「安曇目」の表現された人物埴輪など形象的な遺物の出土が期待される。



立山山13号墳出土の人物埴輪
(註5)文様より転載

註

- (1) 墳丘西括れ部に存在する第2主体部の発見によって、後円部の主石室を第1主体部と呼称する。
- (2) 田村 悟1999「6・7世紀における大型横穴式石室の地域性」「九州における横穴式石室の導入と展開」第2回九州前方後円墳研究会資料集(第Ⅱ分冊)
- (3) 蔵富士 寛2002「石棚考」「日本考古学 第14号」日本考古学協会編 古川弘文館
石屋形の影響によって成立する石棚は、九州全域で39例、そのうち宗像地域では5例(宗像市は平等寺瀬戸1号墳・相原E-1号墳、福津市は新原奴山44号墳・同34号墳・高原5号墳)が知られる。
- (4) 金関丈夫1965「むなかた」「九州文学」1月号 (『発掘から推理する』岩波現代文庫2006岩波書店に再録。)
- (5) 川述昭人1984「立山山13号墳」八女市文化財調査報告書第11集 八女市教育委員会
足部は湾曲しており、騎馬人物である。古墳は直径24mの円墳、時期は小田編年ⅢA期、6世紀中葉に比定される。
- (6) 辰巳和弘「第2章六 むなかた」「埴輪と絵画の古代学」1992 白水社

表 桜京古墳出土遺物観察表 1

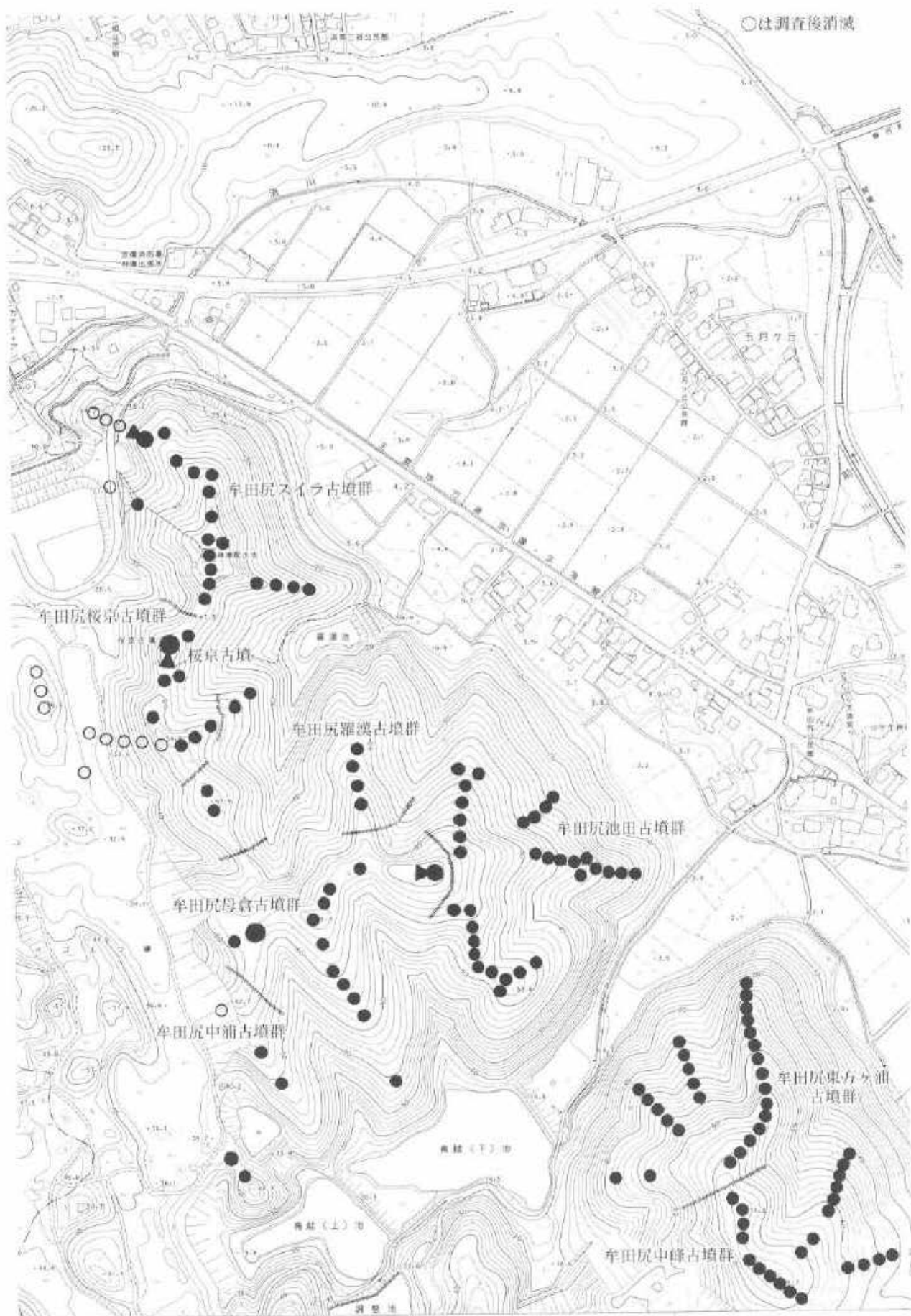
単位: cm, () : 復元

遺物 報告 番号	遺構 番号	種類	器種	口径	高さ	底径	形態特徴	手法特徴	胎土	焼成	色調	備考	遺物登録 番号
001	第1tr	須恵器	甕		7.4+ α		胴部片。	内面は同心円文の当て具痕。外面は横及び斜め方向のカキ目。	良好) 1mm以下の白色砂粒を含む。	良好	内一灰色 外一暗灰色	埴丘盛土出土	00002
002	第1tr	土師器	小皿		1.9+ α	(8.4)	口縁部を僅かに欠く。	内外面ナデ。外底部回転糸切り痕。	良好) 微細な黒色砂粒を含む。	良好	内外一褐色		00001
003	第2tr	土師器	甕 or 甕		5.3+ α		口縁部は肥厚し、端部を小さく外に引き出す。端部上面は平坦に収める。	全面風化のため調整不明。ナデ?	良) 白色砂粒を含む。	良好	内外一褐色		00003
004	第2tr	土師器	高杯?		2.7+ α		高杯の傾曲部片であろう。傾曲部で肥厚する。	全面風化のため調整不明。ナデ?	良好) 白色砂粒をやや多く含む。	良好	内外一暗褐色	埴丘盛土出土	00004
005	第3tr	滑石	白玉	直径0.43	厚さ0.28	孔径0.2	側面に稜線を有する。				内外一灰色	SX1表面付近	00005
006	第4tr	須恵器	ハソウ?		1.1+ α		口縁部片。端部上面にあまい凹みをつくる。	内外面回転横ナデ。外面に薄く自然釉付着。	良好) 白色砂粒を含む。	良好	内一灰色 外一黒灰色		00007
007	第4tr	須恵器	ハソウ?		2.3+ α		胴部片で、穿孔一部が残存。	内面は回転横ナデ。外面は横方向のカキ目。	良好) 白色砂粒をやや多く含む。	良好	内外一赤灰色		00014
008	第4tr	須恵器	ハソウ?		2.8+ α		胴部片で最大径付近に沈線2条。その上段に斜交文を施す。	内外面回転横ナデ。	良好) 白色砂粒をやや多く含む。	良好	内外一赤灰色		00016
009	第4tr	須恵器	甕		8.0+ α		肩部に近い胴部片。	内面は同心円文の当て具痕をナデ消し。外面は格子目タタキ。	良好) 黒色・白色砂粒を含む。	良好	内一淡黄褐色(灰色) 外一灰色		00010
010	第4tr	須恵器	器台	最小径 (10.5)	5.2+ α		長方形のスカシ孔2ヶ所残存。おそらく4方スカシ。上面には剝離痕あり。	内外面回転横ナデ。	良好) 白色砂粒をやや多く含む。	良好	内一淡赤灰色 外一赤灰色		00018
011	第4tr	須恵器	器台		6.0+ α		胴部片。三角スカシ。	内面横ナデ。外面横方向のカキ目。一部沈線状になる部分あり。	良) 2mm以下の砂粒を含む。	良	内一濃い黄褐色 外一黒～にぶい黄褐色		00017
012	第4tr	陶質	磁鉢		3.8+ α		端部は折り返して肥厚させる。	内面上半回転横ナデ。下半横方向カキ目。筒目残存。外面回転横ナデ下端に不定方向ナデ。	良好) 白色砂粒を多く含む。	良好	内外一灰色		00013
013	第4tr	陶質	磁鉢		2.6+ α		口縁部片。口縁部は内側に粘土餅を貼付け、肥厚させる。口縁端部下側には刻目か。	内面横方向カキ目後端目。外面はナデ調整か。	良好) 白色砂粒を多く含む。	良好	内一白灰色 外一灰色		00009
014	第4tr	陶質	不明		2.8+ α		底部片。平底。	内面横ナデ。外面ヘラ状工具によるナデか。	良好) 白色・黒色砂粒を含む。	良好	内外一灰色		00015
015	第4tr	土師器	皿 or 杯		1.4+ α		底部片。平底。	内面不定方向ナデ及び横ナデ。外面横ナデ。外底部糸切りか。	良好) 白色砂粒を少し含む。	良好	内外一暗褐色		00006
016	第4tr	土師器	小皿		0.8+ α	(6.4)	小片。平底で口縁部は大きく開く。	内面風化で不明。外面横ナデ。外底部回転糸切り。	良好) 白色砂粒を少し含む。	良好	内外一白黄色		00012
017	第4tr	土師器	小皿		0.9+ α		小片。	内外面横ナデ。外底部糸切りか。	良好) 白色砂粒を少し含む。	良好	内外一暗褐色		00011
018	第4tr	土師器	小皿		0.5+ α	(6.4)	底面約1/3残。平底。	内面ナデ及び回転横ナデ。外面横ナデか。外底部回転糸切り。	良好) 砂粒をほとんど含まない。	良好	内外一褐色		00008
019	第4tr	鉄器	鉄鏃		長さ2.4+ α	幅0.4	鉄鏃茎片。	本質付着。					00020
020	第4tr	鉄銭	不明	直径2.46	孔径0.49	重さ2.6 μ + α	銘文不明。						00021
021	第4tr	鉄器	弓金具		長さ2.75	幅0.65	断面は中位方形。端部円形。	本質付着。					00019
022	第4tr	銅銭	元祐通寶			重さ0.3 μ + α	(元) 祐通(寶) 初鑄1086年						00049
023	第4tr	銅銭	不明	直径2.46	孔径0.49	重さ1.1+ α g	元(祐 or 豊 or 符)(通) 寶						00050
024	第4tr	銅銭	洪武通寶	直径2.4	孔径0.6	重さ2.5 μ	初鑄1368年						00048
025	第4tr	銅銭	寛永通寶	直径2.5	孔径0.6	重さ1.9 μ	元祐通						00052
026	第4tr	銅銭	寛永通寶	直径2.2+ α		重さ0.9+ α g	(寛) 永(通) 寶						00053
027	第5tr	須恵器	甕		8.6+ α		口縁部片。シャープさ残る。	内外面とも回転横ナデ。口縁端部に黒面三角形の凸部。下に細かな波状文を施す。	良好) 白色砂粒を多く含む。	良好	内一灰一灰黒色 外一灰黒色		00024
028	第5tr	須恵器	甕		10.6+ α		胴部一底部片。	内面同心円文当具痕。外面寛い平行タタキ後一部ハケ目。	良好) 白色砂粒を少し含む。	良好	内一青灰色 外一黒灰色		00023
029	第5tr	須恵器	甕		9.6+ α		胴部片。	内面同心円文当具痕。外面格子タタキ。	良好) 白色砂粒を含む。	良好	内一灰褐色 外一灰色		00022

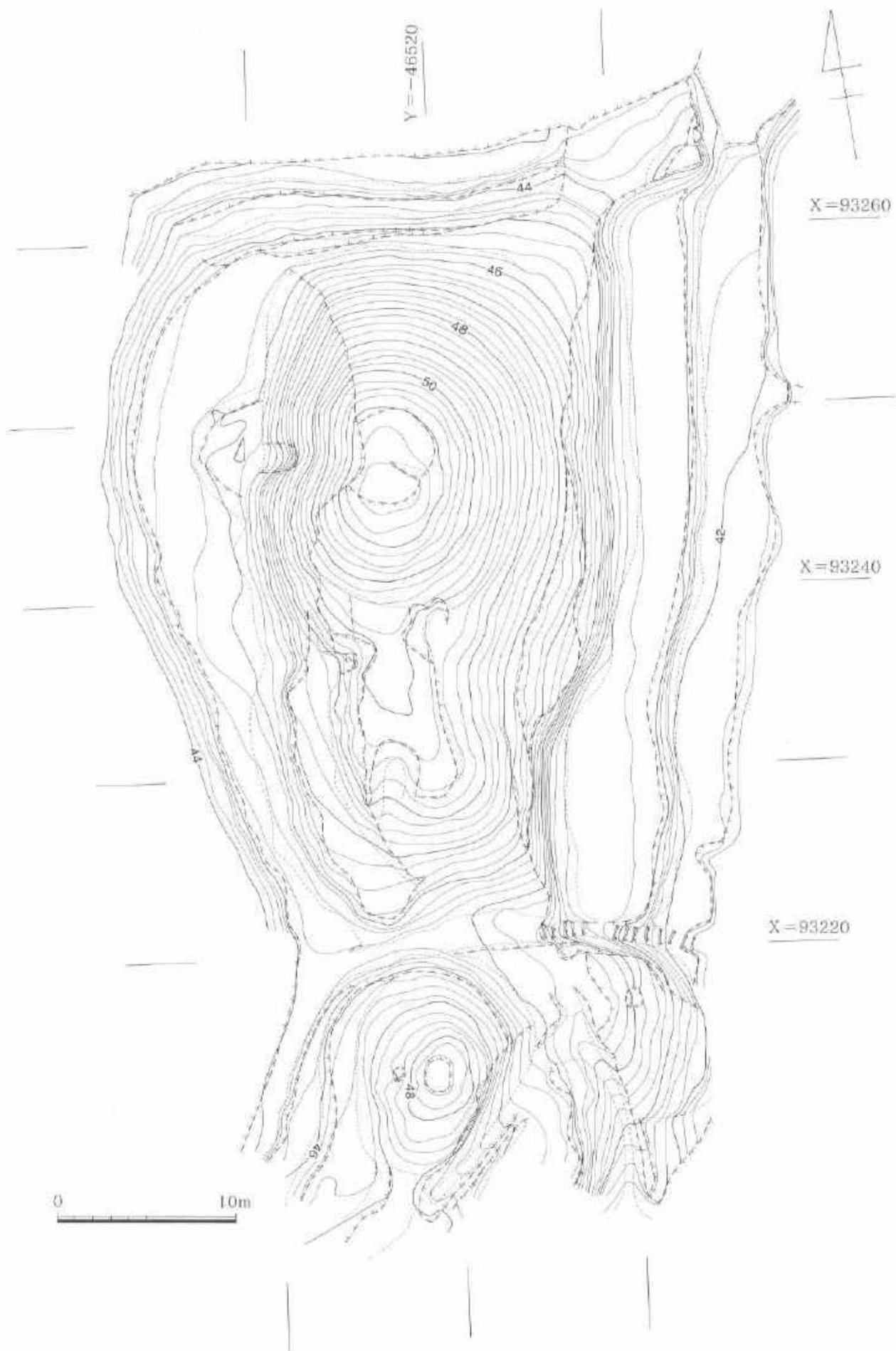
表 桜京古墳出土遺物観察表 2

単位: cm. () : 複元

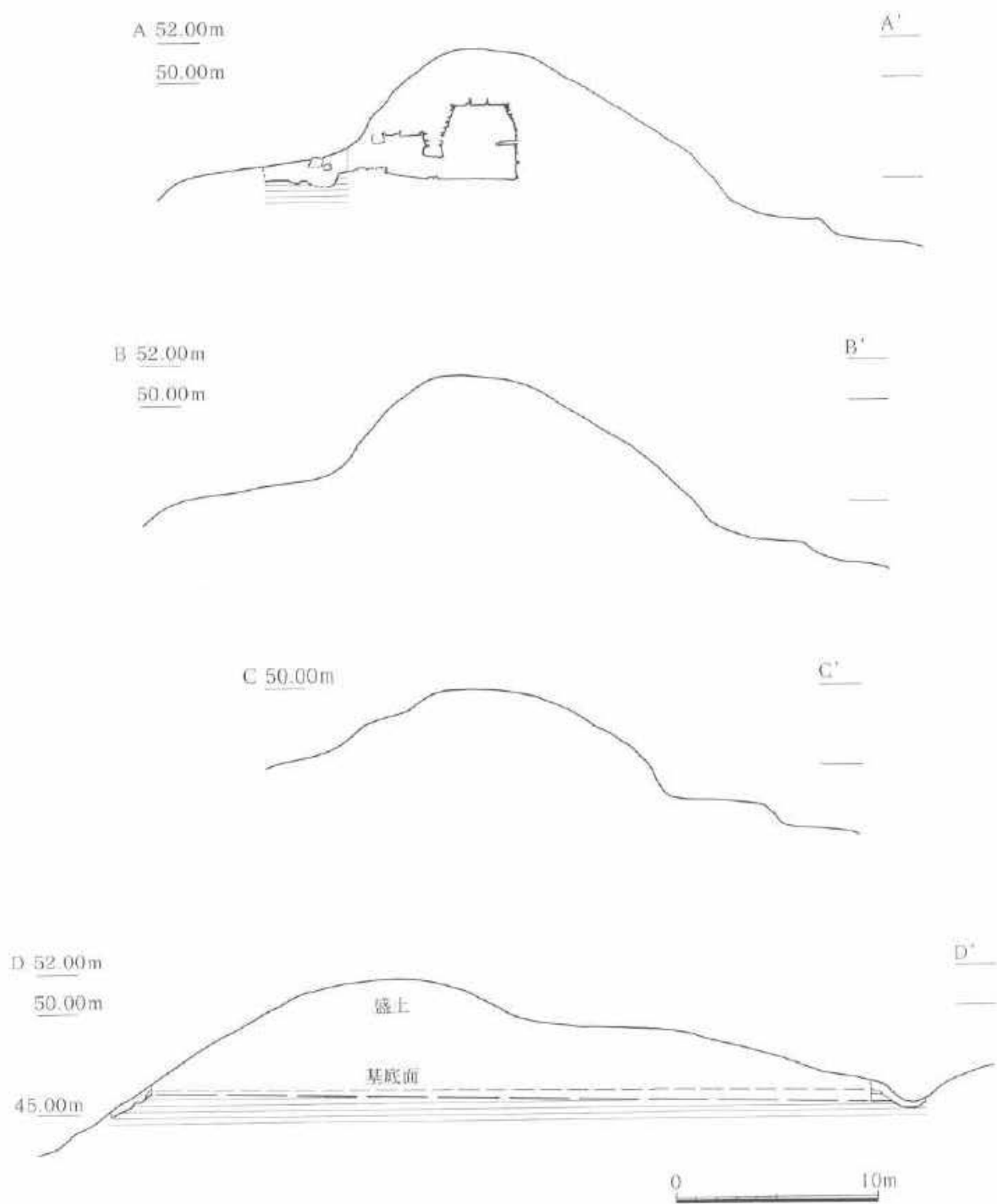
遺物 報告 番号	通期番号	種類	器種	口径	器高	直径	形態特徴	手法特徴	胎土	焼成	色調	備考	遺物登 録番号
030	第5tr	ガラス	小土	直径0.4— 0.35	厚さ0.23	孔径0.12					紺色		00025
031	第6tr	須恵器	坏身	(12.8)	4.6	受部径 (15.0)	口縁1/2が残存。口縁部はほぼ直状に立ち 上がり、端部を丸く収める。	内面不定方向ナデ。口縁—受部回転横ナデ。 体部外面2/3回転ヘラ削り。	良好) 白色砂粒を僅かに含む。	良好	内外—青灰色	ヘラ削り右	00026
032	第6tr	須恵器	坏身		3.0+ _a		口縁部小片。	内面一部に不定方向ナデ。他は回転横ナデ。	良好) 白色砂粒を僅かに含む。	良好	内—淡青灰色 外—淡赤灰色		00027
033	第6tr	土師器	不明		4.2+ _a	胴部最大 (4.2)	小壶上、子持臺台などの子持部分片?	全面風化のため調整不明。	良好) 白色砂粒を少し含む。	良好	内外—棕色		00028
034	第6tr	土師器	高坏	8.0	5.0+ _a	胴部径4.4	口縁1/2残存。胴部は大きく開き、坏部は も字状に屈曲して立ち上がり口縁部は丸く 収める。屈曲部に斜な交線を貼付する。	坏部内面はヘラ状工具による掻き取り痕、 外面屈曲部付近にヘラ状工具による浅い刻 み、全面風化進む。	良好) 2—3mm程の白色砂粒 を含む。	良好	内外—棕色		00031
035	第6tr	土師器	高坏		2.5+ _a		胴部片。	全面風化のため調整不明。上面に縦線状の 接合痕残存。	良好) 白色砂粒を少し含む。	不良	内外—橙褐色		00030
036	第6tr	土師器	高坏		2.4+ _a		胴部片。	全面風化のため調整不明。	やや粗) 白色砂粒を多く含む。	不良	内外—淡黄褐色		00029
037	第7tr	須恵器	坏身		2.3+ _a		口縁部片。	回転横ナデ。	良好) 白色砂粒を少し含む。	良好	内外—紫灰色		00032
038	第7tr	土師器	甕	(21.0)	5.0+ _a		口縁部片。直状に立ち上がり、口縁部上面 は平坦、端部は水平方向につまみ出すが程 かに膨れている。	内外面横ナデ、器壁剥離。	良好) 白色砂粒を含む。	良好	内外—橙褐色		00034
039	第7tr	土師器	甕or蓋		2.8+ _a		口縁部片。端部は外傾しややつまみ出す。	全面風化のため調整不明瞭。ナデ調整?	良好) 白色砂粒を少し含む。	良好	内外—黄褐色	黒斑あり	00037
040	第7tr	土師器	蓋台		5.7+ _a		胴部片。外面に沈線1条。長方形スカシが 4方向?	内面ナデ調整? 外面風化のため調整不明。	良好) 白色砂粒を少し含む。	良好	内—橙褐色 外—黄褐色		00036
041	第7tr	土師器	高坏		2.5+ _a		胴部片。	全面風化のため調整不明。	やや粗) 白色砂粒を多く含む。	やや不良	内外—橙褐色		00033
042	第7tr	土師器	高坏		3.6+ _a		坏部の屈曲部片。	内面ナデ調整? 指頭印痕あり。外面風化の ため調整不明。	良好) 白色砂粒を少し含む。	良好	内—黄褐色 外—橙褐色		00035
043	第8tr	須恵器	高坏		4.7+ _a	胴部径 (4.3)	胴部片。3方向にスカシ。	胴内面縦り痕。外面々々目。	良好) 白色砂粒を少し含む。	良好	内外—黒灰色 坏内—灰色		00043
044	第8tr	須恵器	不明		2.6+ _a		器種不明。蓋台? スカシ孔が一部残存。	内外面回転横ナデ。	良好) 白色砂粒を少し含む。	良好	内外—青灰色		00042
045	第8tr	須恵器	甕		8.5+ _a		口縁部片。端部は厚厚し上方向につまみ上 げる。	内面調整不明瞭。下端に当て具痕残存。外 面2条沈線。波状文、1条沈線。波状文。	良好) 砂粒をほとんど含まな い。	良好	内—淡黄褐色 外面—黒色自然釉。露 胎部灰色		00038
046	第8tr	須恵器	甕	(24.0)	7.3+ _a	胴部径 (18.2)	口縁部1/6片。	内外面回転横ナデ。外面肩部にカキ目調整。	良好) 白色砂粒を少し含む。	良好	内—灰～黄褐色 外—黒褐色自然釉。露 胎部は灰色。		00041
047	第8tr	須恵器	甕		2.7+ _a		口縁部片。	全面風化のため調整不明瞭。	良好) 白色砂粒を少し含む。	良好	内—淡黄灰色 外—黒色		00044
048	第8tr	須恵器	甕		7.5+ _a		口縁部片。端部欠損。	全面回転横ナデ。外面粗い縦状文と沈線。	良好) 白色砂粒を少し含む。	良好	内外—淡青灰色		00039
049	第8tr	須恵器	甕		4.6+ _a		胴部片。	全面回転横ナデ。	良好) 白色砂粒を少し含む。	良好	内外—灰色		00049
050	後円部墳丘 表面採集	土師器	甕		5.1+ _a		口縁部片。	ナデ調整。	良好) 白色砂粒を含む。	良好	内外—棕色		00045
051	後円部墳丘 表面採集	土師器	高坏		4.1+ _a		口縁部片。屈曲部に僅かな段あり。	全面風化のため調整不明。	良好) 白色砂粒を多く含む。	良好	内—橙～灰褐色 外—灰褐色		00046
052	後円部南西 部表面採集	須恵器	ハソウ		3.7+ _a		体部片。	回転横ナデ。外面に刻目文。沈線1条。	良好) 2mm以下の砂粒を少 量含む。	良	内外—棕色		00047



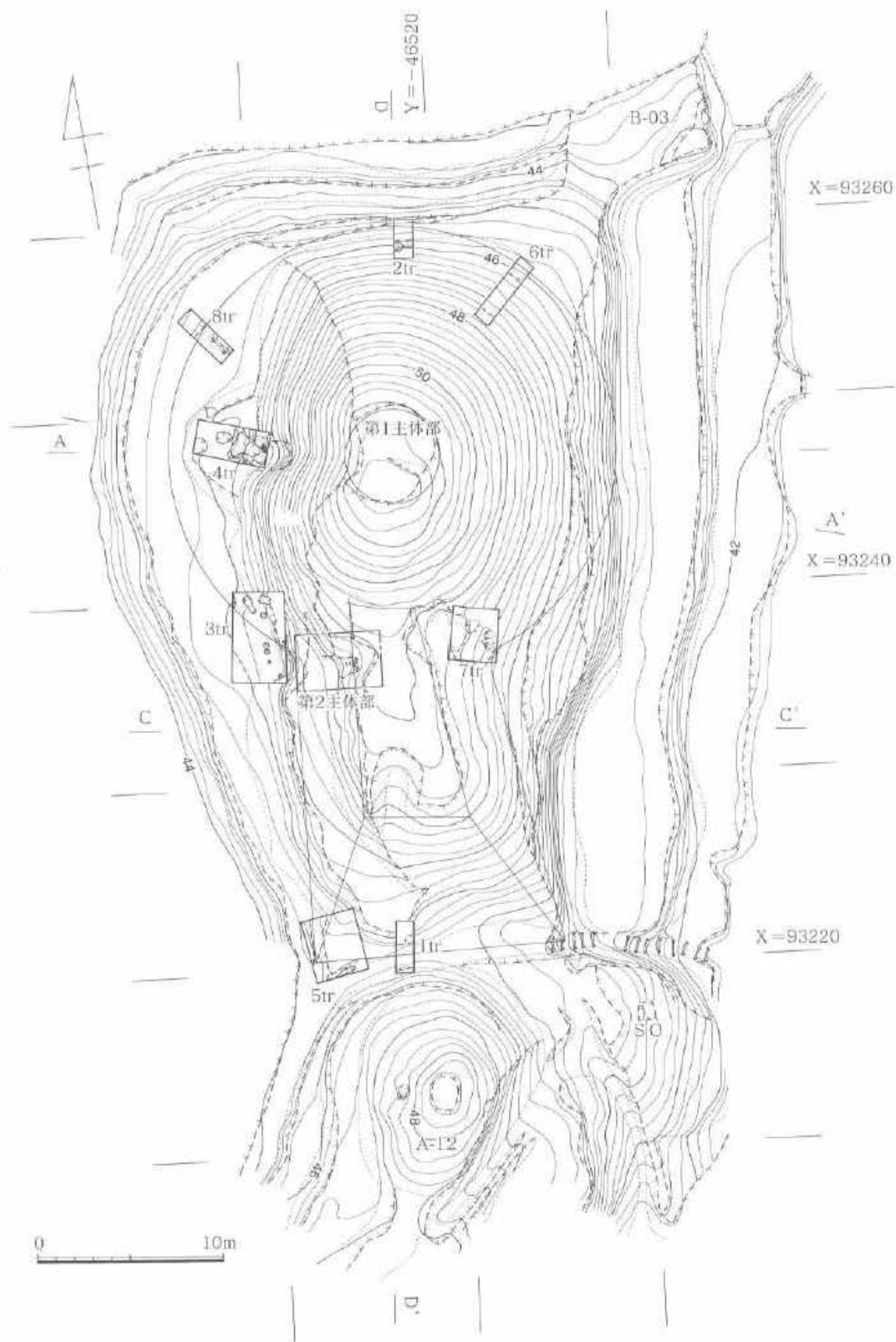
第2図 桜京古墳周辺の古墳分布地図 (1/5,000)



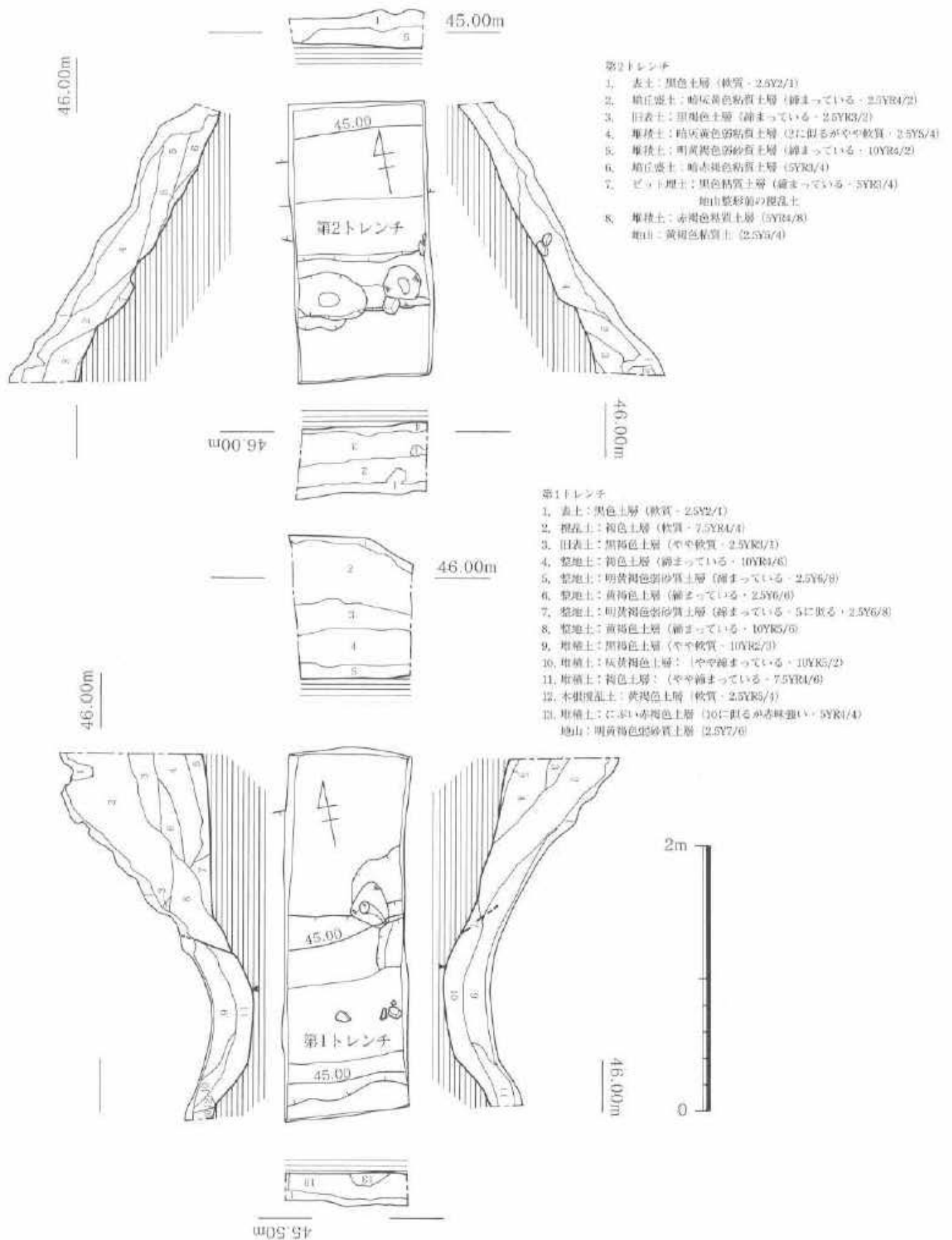
第3図 桜京古墳の現況測量図 (1/300)



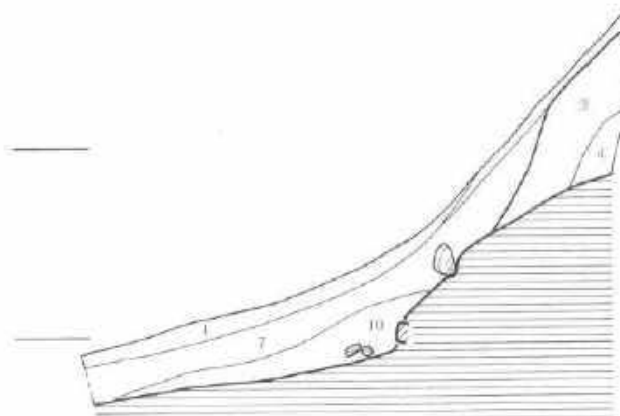
第4図 桜京古墳の墳丘断面図 (1/300)



第6図 桜京古墳の墳丘復元図 (1/300)



第7図 第1・2トレンチ実測図 (1/40)

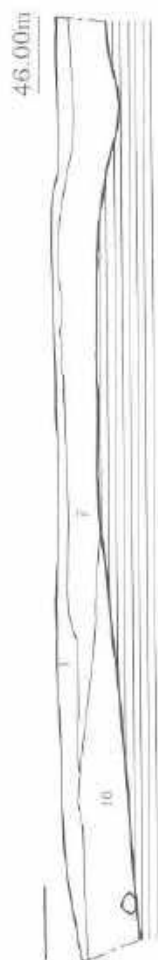


47.00m

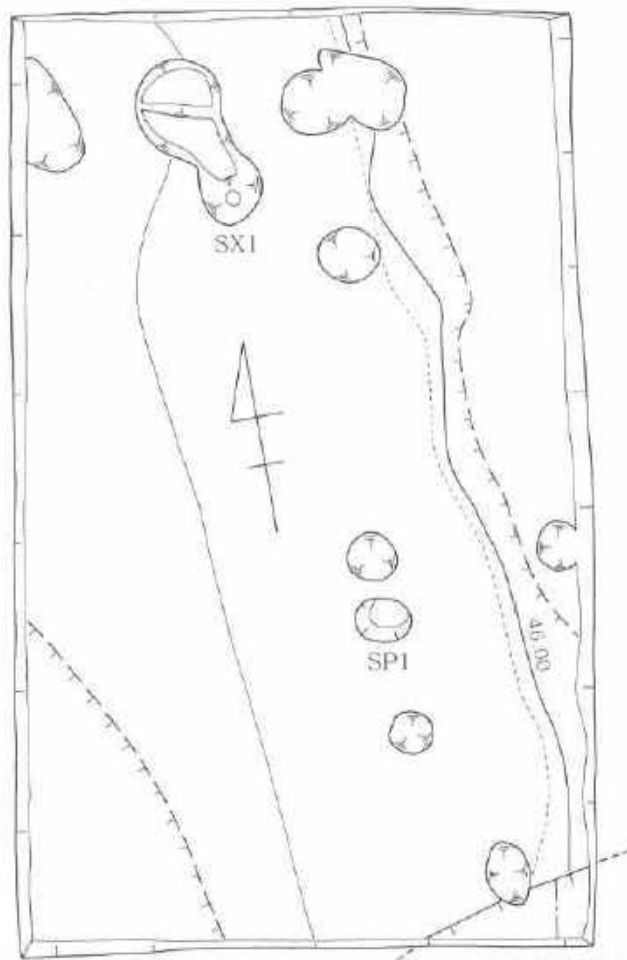
46.00m

第3トレンチ

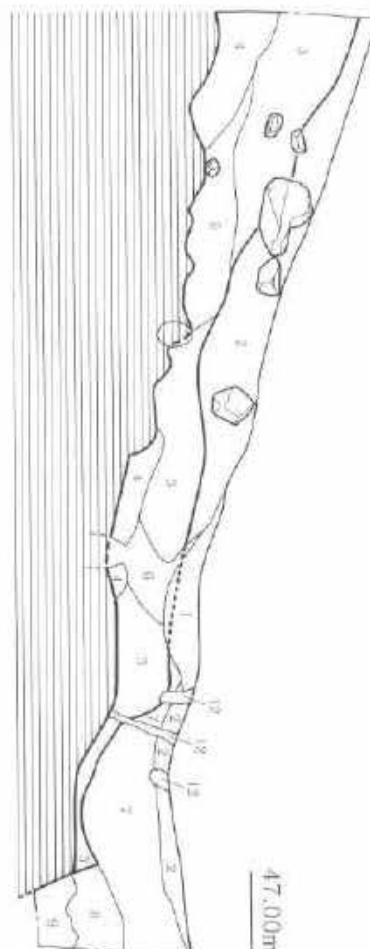
1. 表土：黒褐色土層（軟質・10YR3/1）
 2. 開墾層：黄褐色土層（軟質・10YR6/2）
 3. 墳丘盛土：黄褐色粘質土層（10YR5/6）
 4. 墳丘盛土：明赤褐色粘質土層（締まっている・5YR5/6）
 5. 墳丘盛土：明黄褐色土層（3に似るが締まっている・10YR6/6）
 6. 掘削土：にじみ黄褐色土層（軟質・10YR5/4）
 7. 掘削土：オリーブ褐色土層（軟質・2.5Y4/3）
 8. 第2主体部墓道埋土：暗黄褐色土層（2.5Y4/2）
 9. 第2主体部墓道埋土：暗黄褐色土層（2.5Y4/2）
＋黄褐色土砂（10YR5/6）を含む
 10. 堆積土：黄褐色粘質土層（7に似るがやや締まっている・10YR5/6）
 11. 堆積土：褐色粘質土層（10に似る・7.5YR4/6）
 12. 本埋没土：黄褐色土層（軟質・2.5YR5/4）
- 地山：黄褐色（10YR8/6）～灰色（2.5YR5/8）の
マサ土で多々大粒の礫を含む



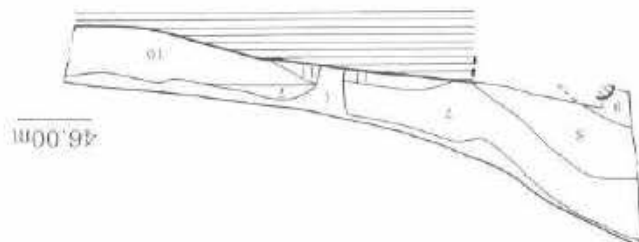
46.00m



第2主体部墓道(推定)



47.00m



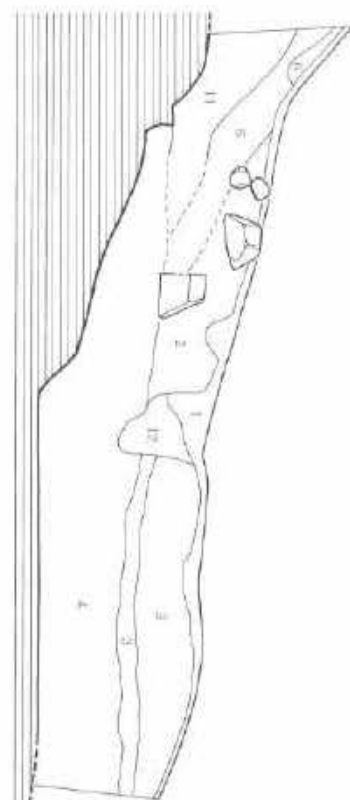
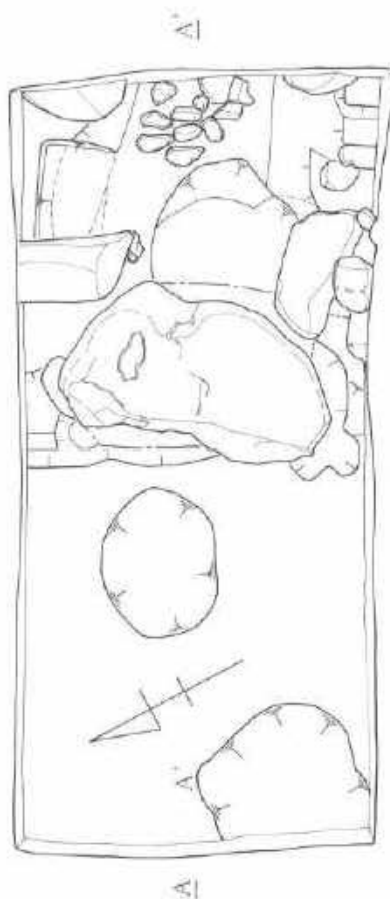
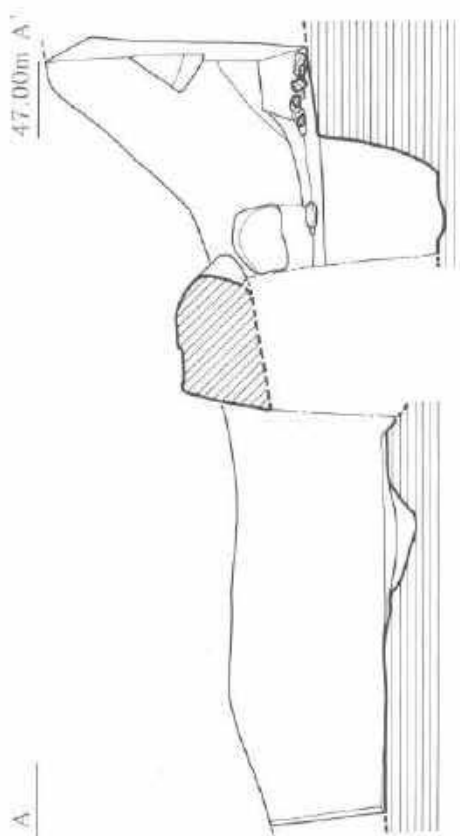
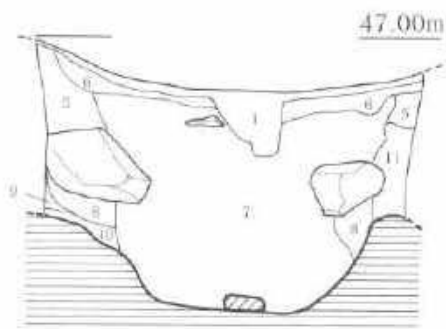
46.00m



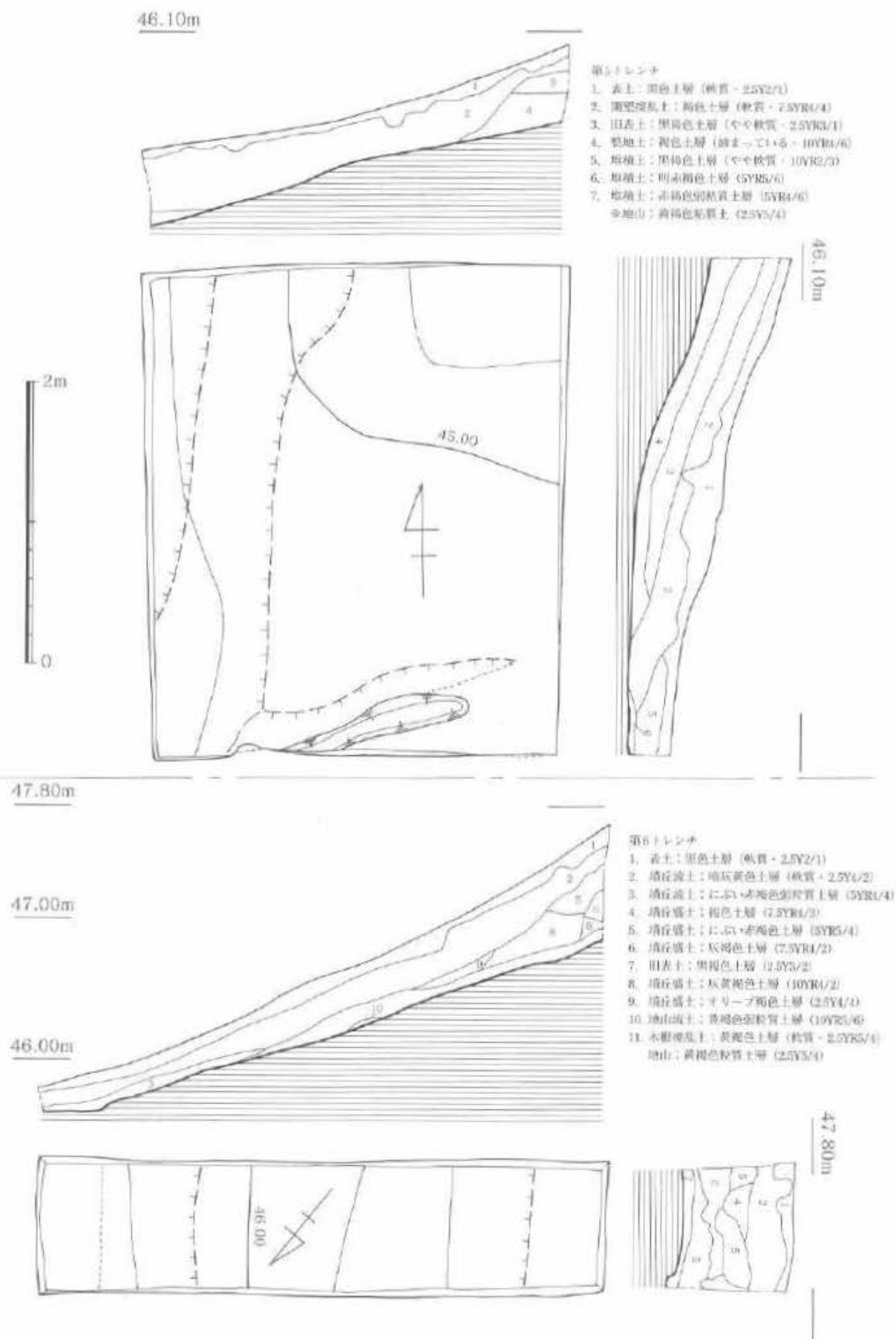
第8図 第3トレンチ実測図 (1/40)

第4トレンチ

1. 表土：暗灰黄色土層 (2.5Y4/2)
2. 昭和45年度調査時の石室遺構跡土：黄褐色土層（軟質・2.5Y5/4）
3. 昭和49年度調査時の表土：黄灰色土層 (2.5Y4/1)
4. 間壁地盤土：オリーブ褐色土層 (2.5Y4/5)
5. 堆積土：暗褐色土層（やや軟質・7.5Y3/4）
6. 堆積土：黄褐色土層（やや軟質・2.5Y5/3）
7. 埋め戻し土：にじみ黄褐色土層（やや軟質・2.5Y6/4）
8. 堆積土：にじみ黄褐色土層 (10YR4/3)
9. 堆積土：オリーブ色土層 (5Y6/6)
10. 堆積土：にじみ黄褐色土層 (2.5Y6/4)
11. 堆積土：オリーブ褐色土層（軟質・2.5Y4/3）
12. 埋戻し土：黄褐色土層 (2.5Y3/2)



第9図 第4トレンチ実測図 (1/40)



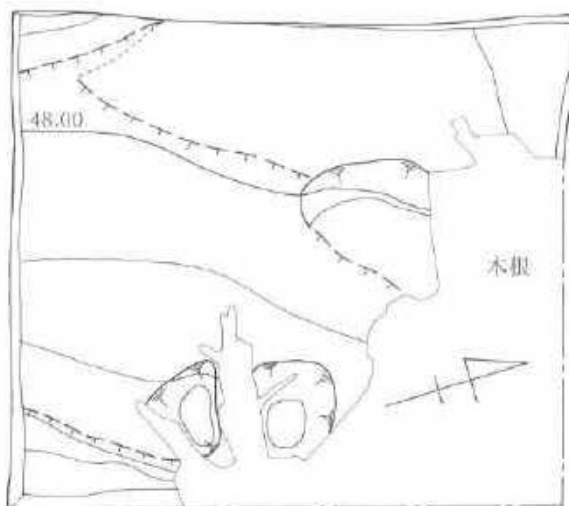
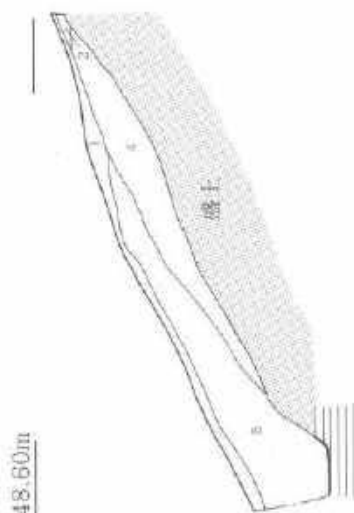
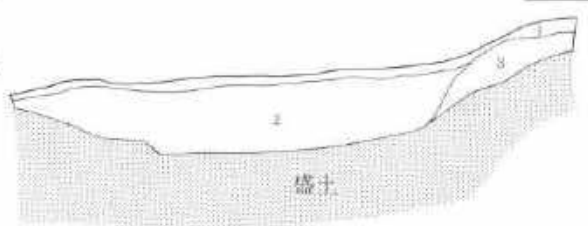
第10図 第5・6トレンチ実測図 (1/40)

第7トレンチ

1. 表土：黒色土層（軟質・2.5Y2/1）
2. 埋乱土：暗褐色土層（軟質・10YR3/1）
3. 埋乱土：褐色土層（10YR4/6）
4. 埋乱土：暗オリーブ褐色土層（軟質・2.5Y3/3）
5. 埋乱土：暗褐色土層（軟質・7.5YR3/3）
- 地層：暗褐色粘質土層（7.5YR5/0）

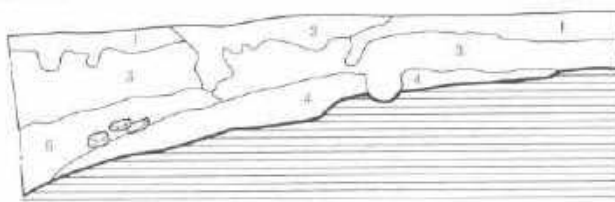
49.00m

48.60m



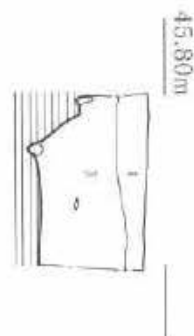
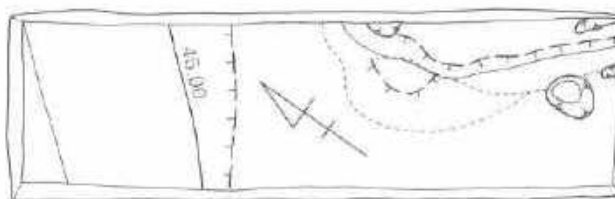
第7トレンチ

45.80m



第8トレンチ

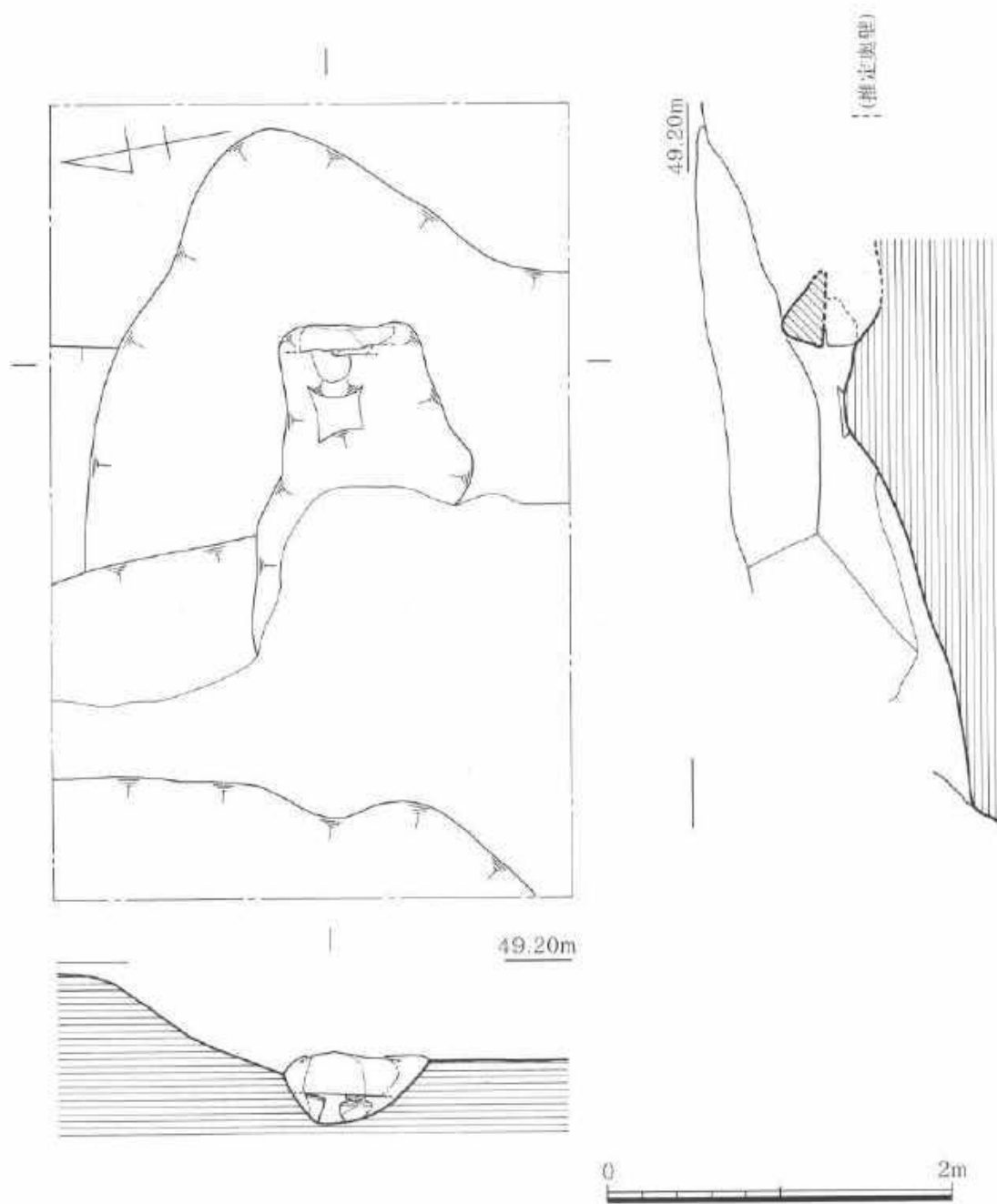
1. 表土：暗灰黄色土層（2.5Y4/2）
2. 現代焚き火跡：暗赤灰色土層（灰灰・焼土粒まじり・2.5YR3/1）
3. 埋乱土：オリーブ褐色土層（土器含む・2.5Y3/6）
4. 埋乱土：黄褐色土層（3より明るい・2.5Y5/6）
5. 谷部埋乱土：黒褐色土層（2.5Y3/2）



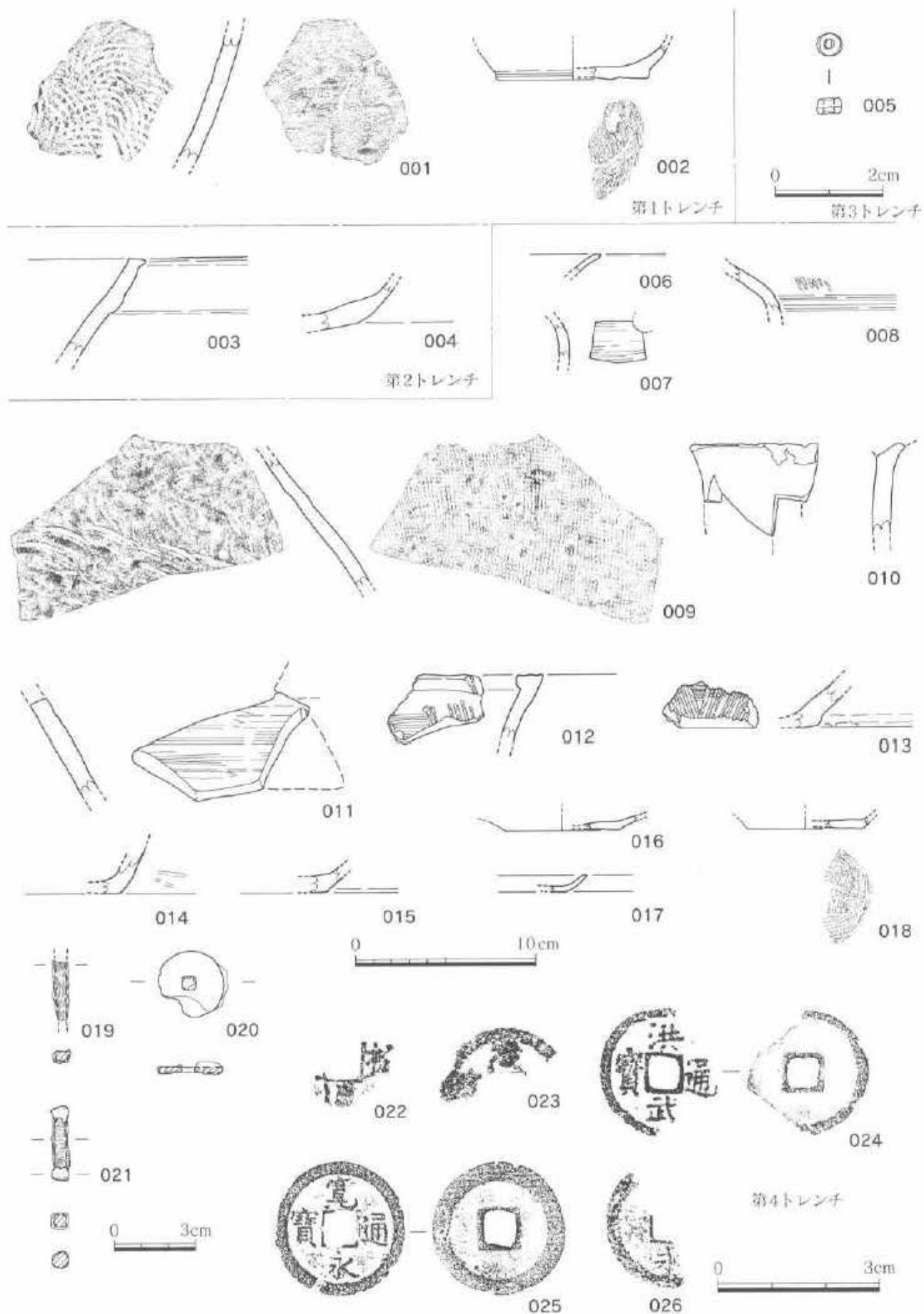
0 2m

第8トレンチ

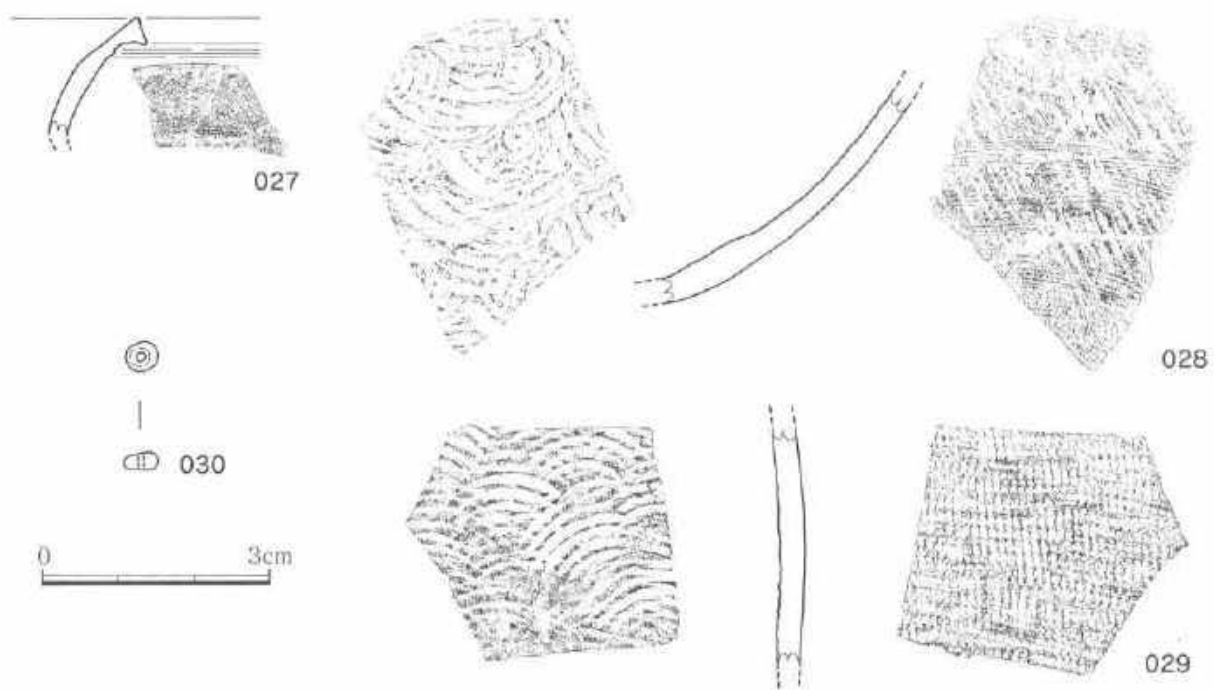
第11図 第7・8トレンチ



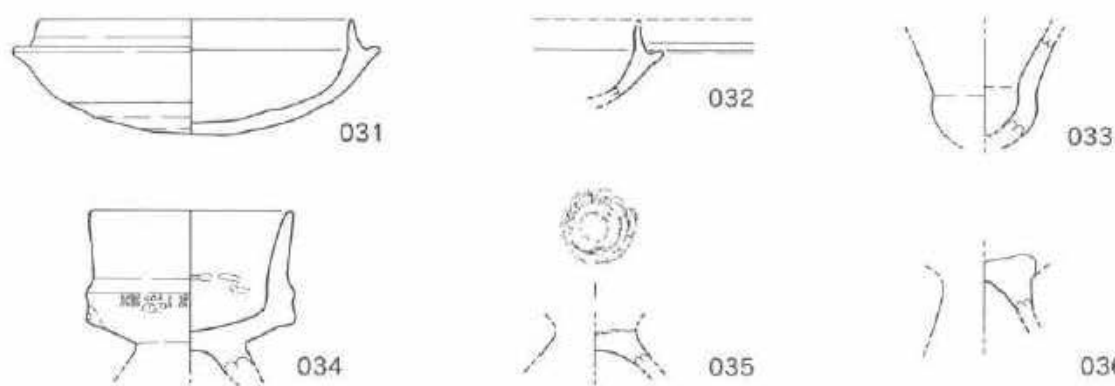
第12図 第2主体部現況実測図 (1/40)



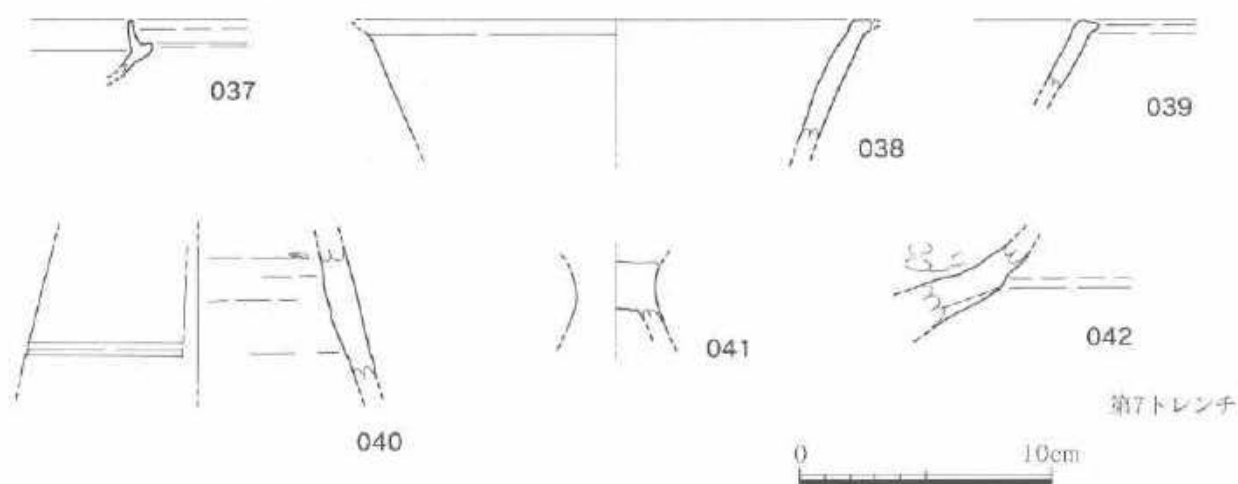
第13図 各トレンチ出土遺物実測図① (1/3・1/2・1/1)



第5トレンチ

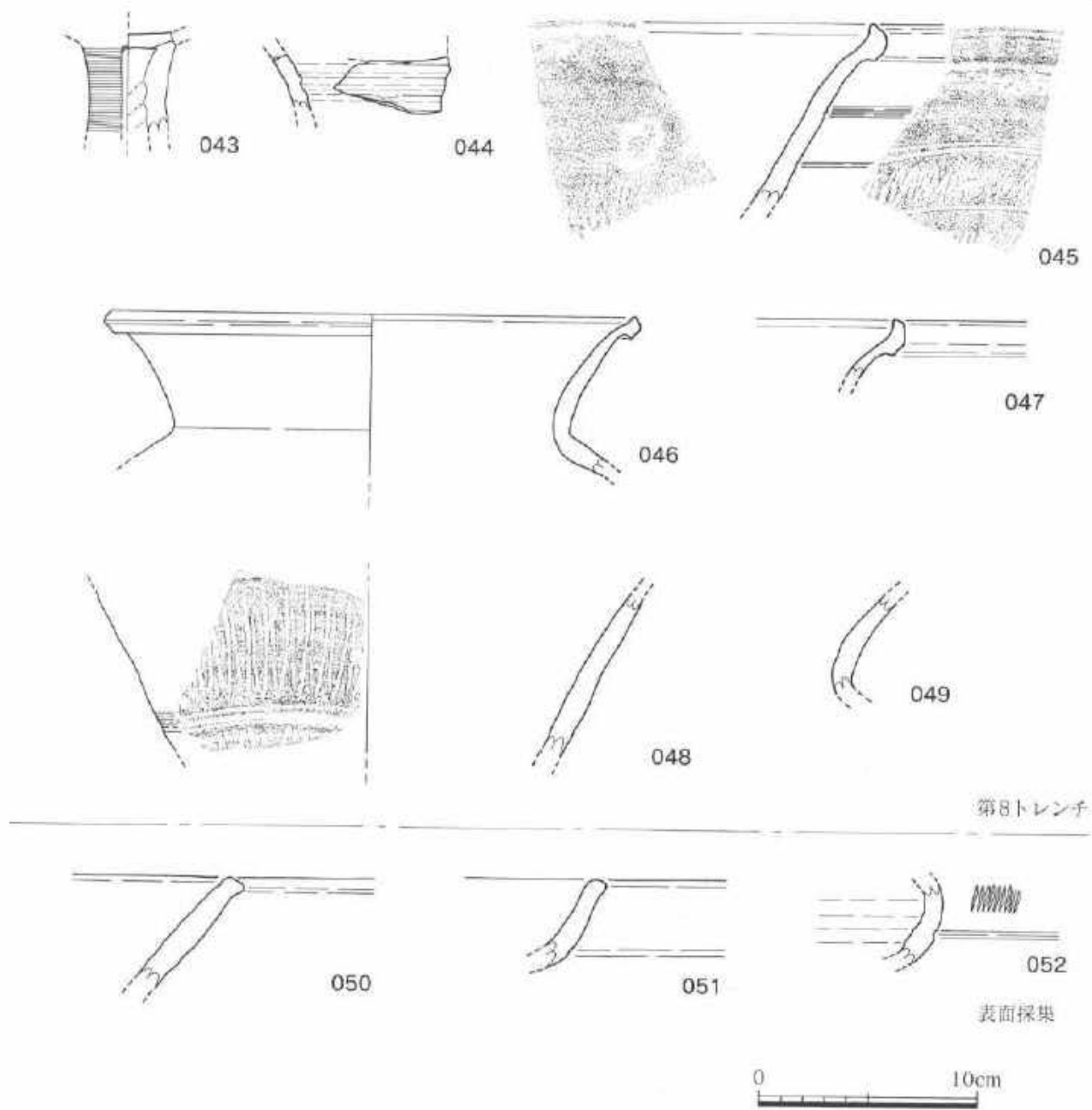


第6トレンチ

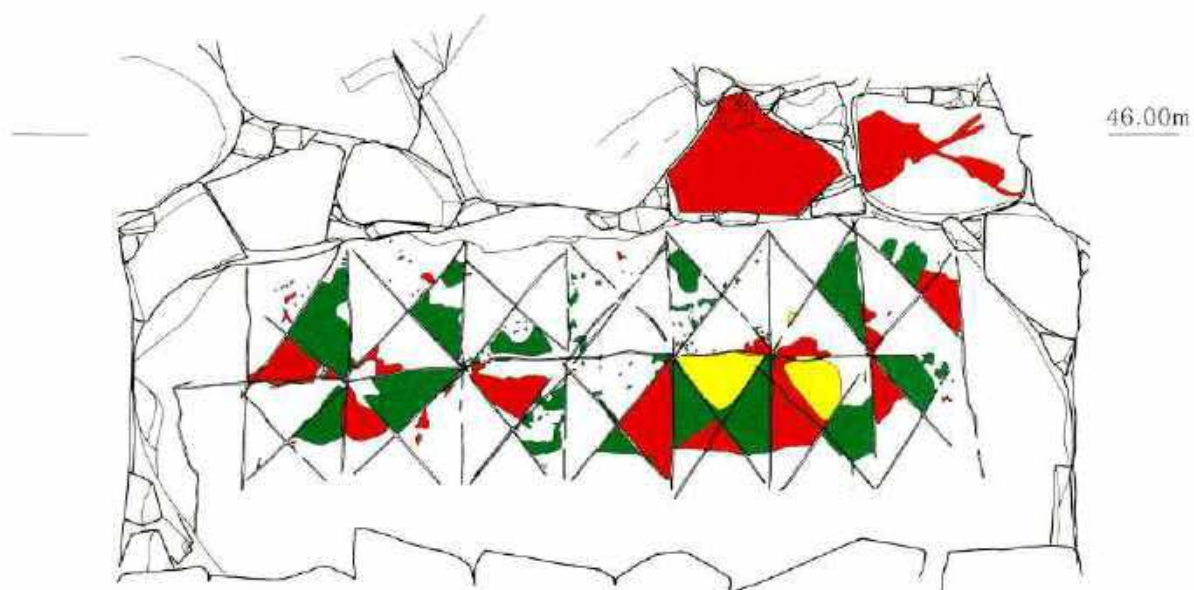


第7トレンチ

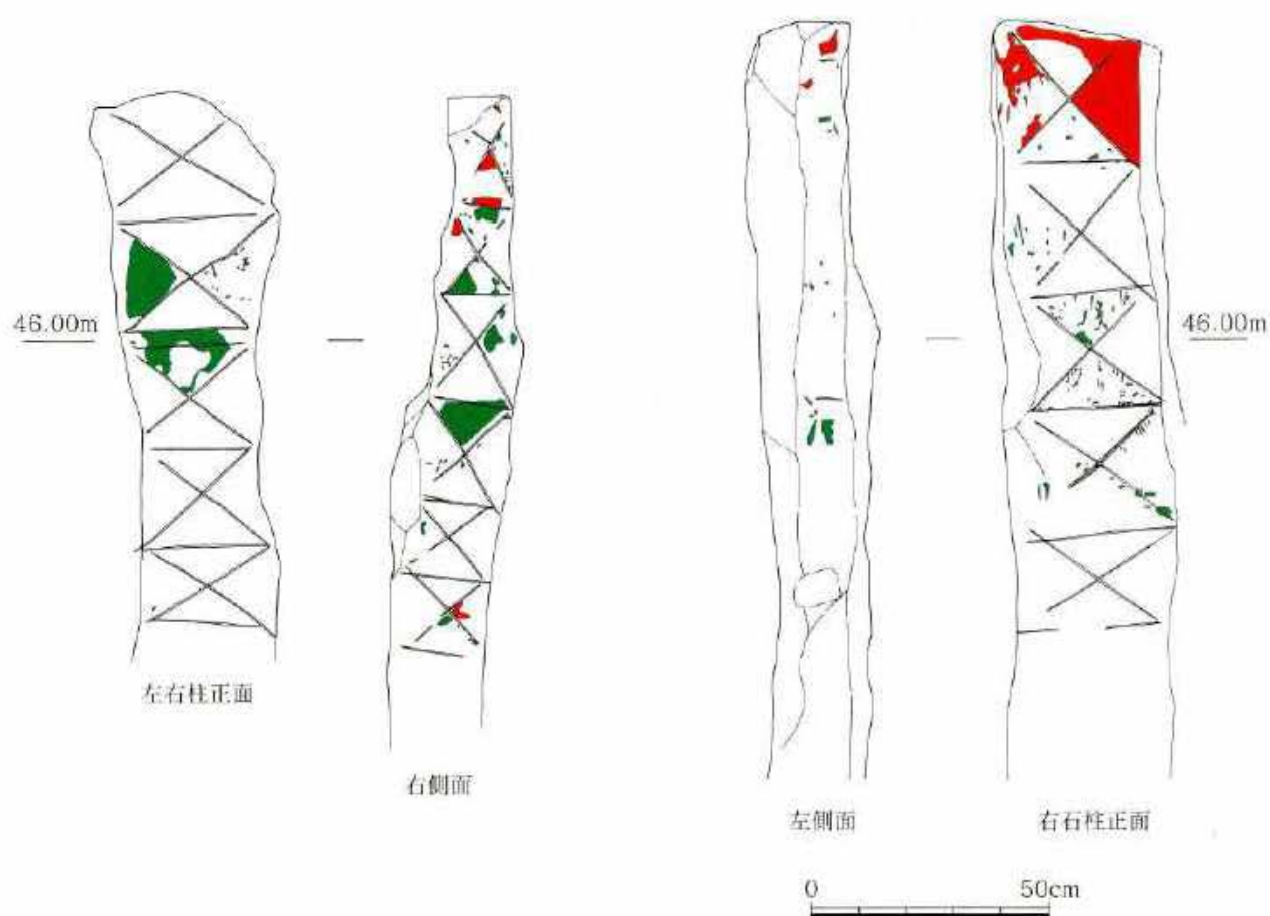
第14図 各トレンチ出土遺物実測図② (1/3・1/1)



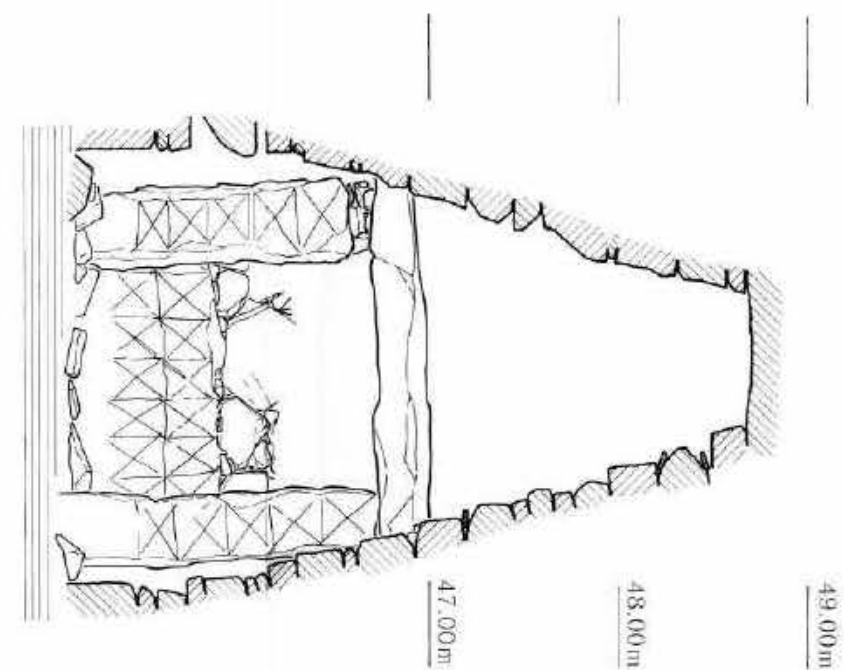
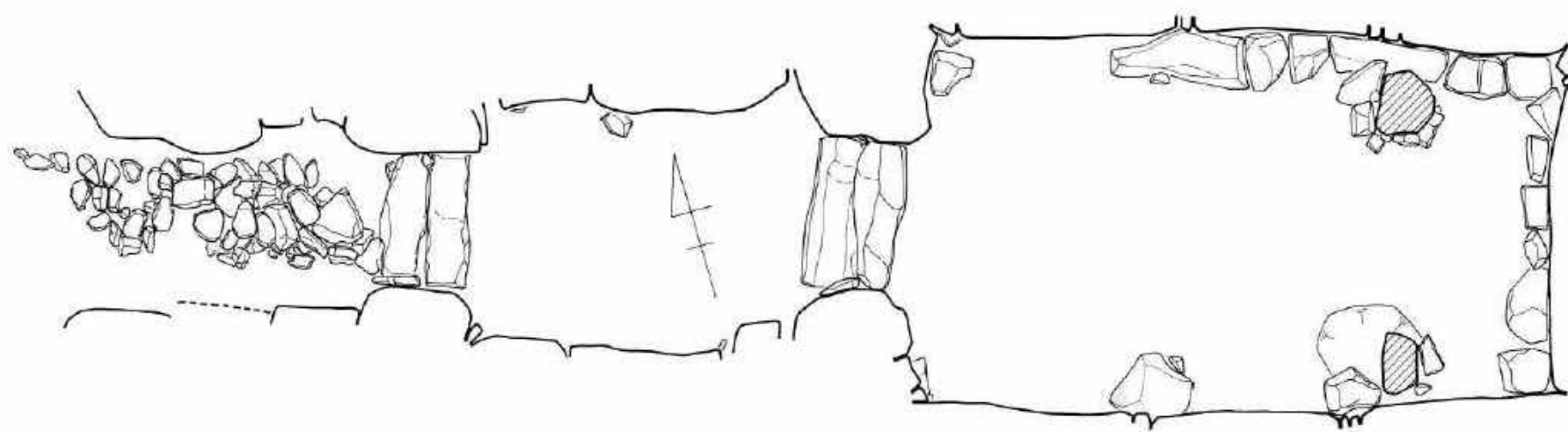
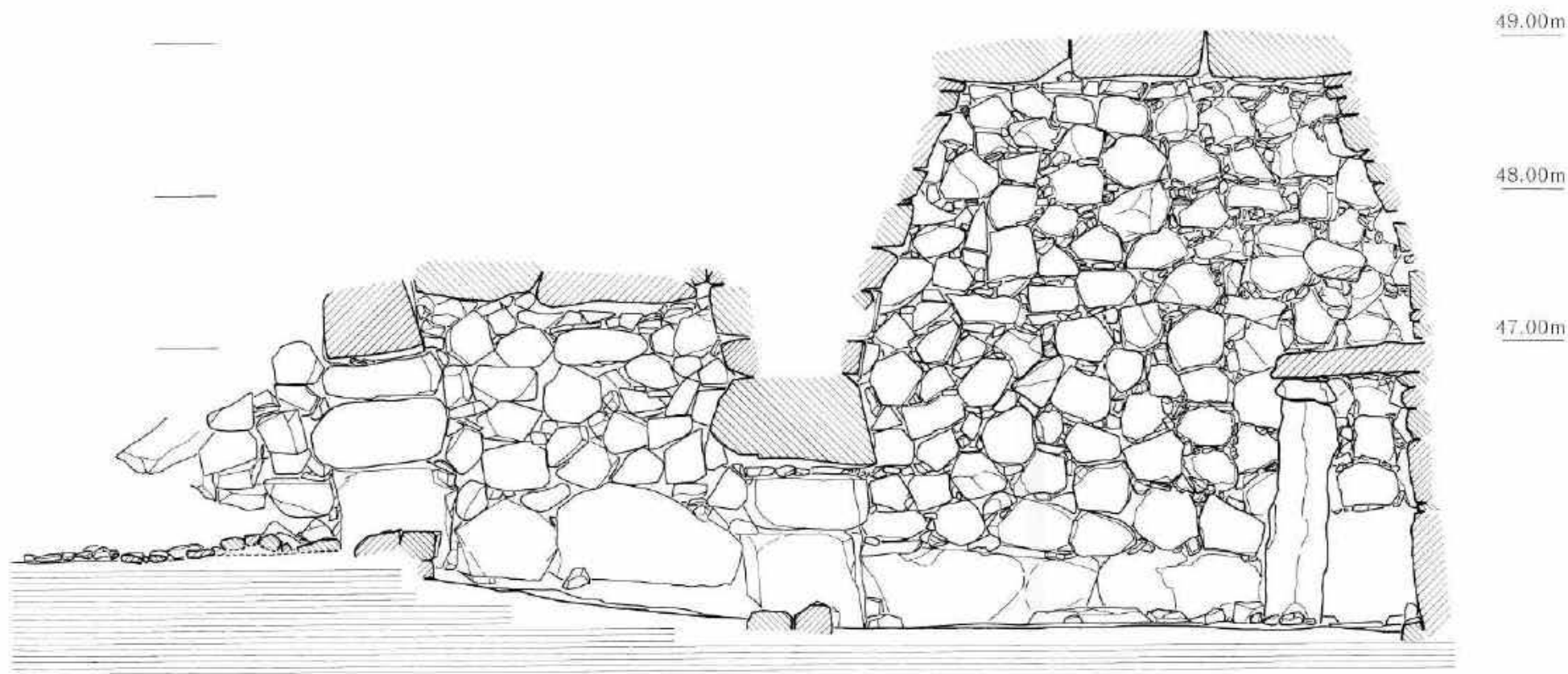
第15図 各トレンチ出土遺物及び表面採集遺物実測図③ (1/3)



奥壁



第16図 第1主体部石屋形の装飾 (1/16)



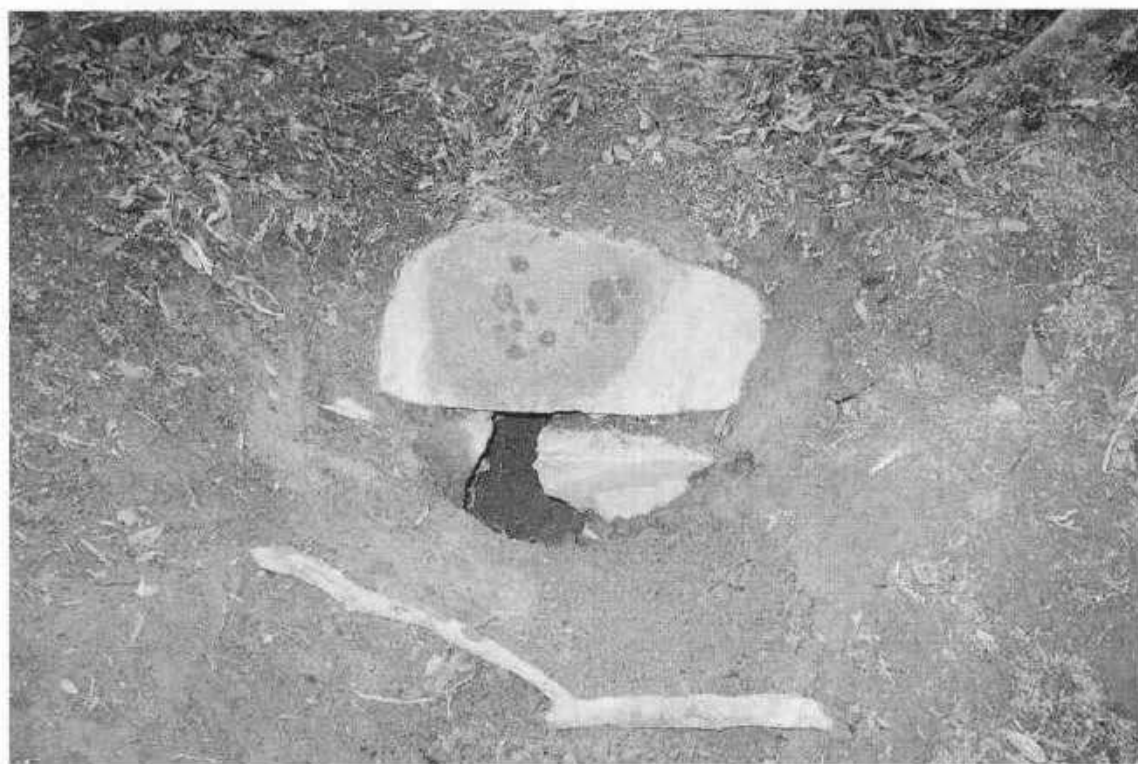
第17図 第1主体部実測図 (1/40)

図版

図版 1



(1) 第2主体部発見時の状況(西から)



(2) 第2主体部清掃後(西から)



(1) 前方部より後円部を望む (南から)



(2) 後円部より前方部を望む (北から)



(3) 里道から前方部を望む (東から)



(4) 前方部墳裾 (西から)



(5) 墳丘東側面 (前方部南東隅から)



(6) 墳丘西側面 (後円部北西端から)



(7) 第1主体部入口の仮密閉状況 (西から)



(8) 牟田尻桜京A-12号墳 (北から)



(1) 牟田尻桜京 A-12号墳盗掘坑 (西から)



(2) 牟田尻桜京 B-03号墳 (東から)



(3) 第1トレンチ完掘状況 (南から)



(4) 第1トレンチ東壁土層 (西から)



(5) 第1トレンチ西壁土層 (東から)



(1) 第2トレンチ完掘状況 (北から)



(2) 第2トレンチ西壁土層 (東から)



(3) 第2トレンチ東壁土層 (西から)



(4) 第2トレンチ南壁土層 (北から)



(5) 第3トレンチ完掘状況 (南から)



(1) 第3トレンチ完掘状況 (西から)



(2) 第3トレンチ南壁土層 (北から)



(3) 第3トレンチ第2主体部推定墓道東及び南壁土層 (北西から)



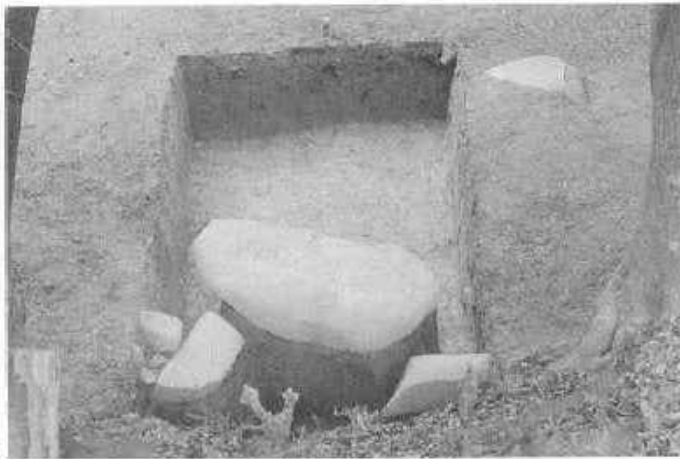
(4) 第3トレンチ第2主体部推定墓道検出状況 (西から)



(5) 第4トレンチ第1主体羨道部の敷石検出状況 (南から)



(1) 第4トレンチ完掘状況 (西から)



(2) 第4トレンチ完掘状況 (東から)



(3) 第5トレンチ完掘状況 (南から)



(4) 第5トレンチ北壁土層 (南から)



(5) 第5トレンチ東壁土層 (西から)



(6) 第5トレンチ東壁土層拡大 (西から)



(7) 第6トレンチ完掘状況 (北東から)



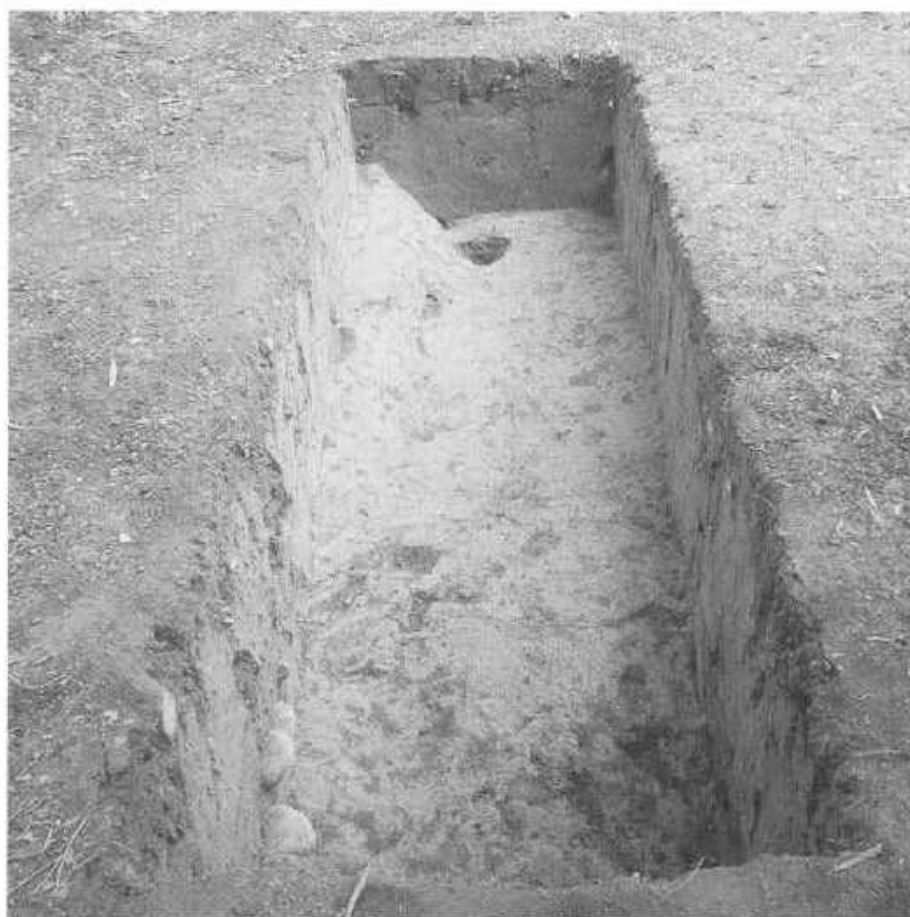
(8) 第6トレンチ南及び西壁土層 (東から)



(1) 第7トレンチ括れ部検出状況 (西から)



(2) 第7トレンチ括れ部検出状況 (南から)



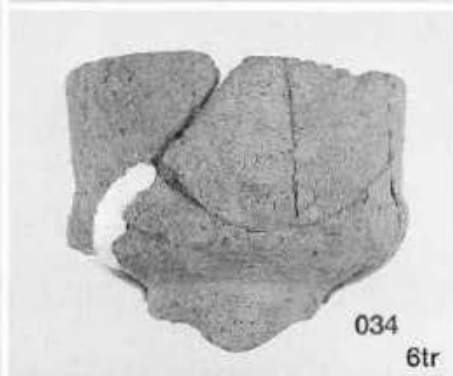
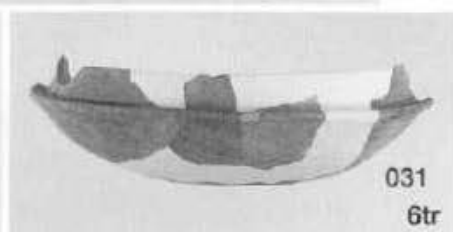
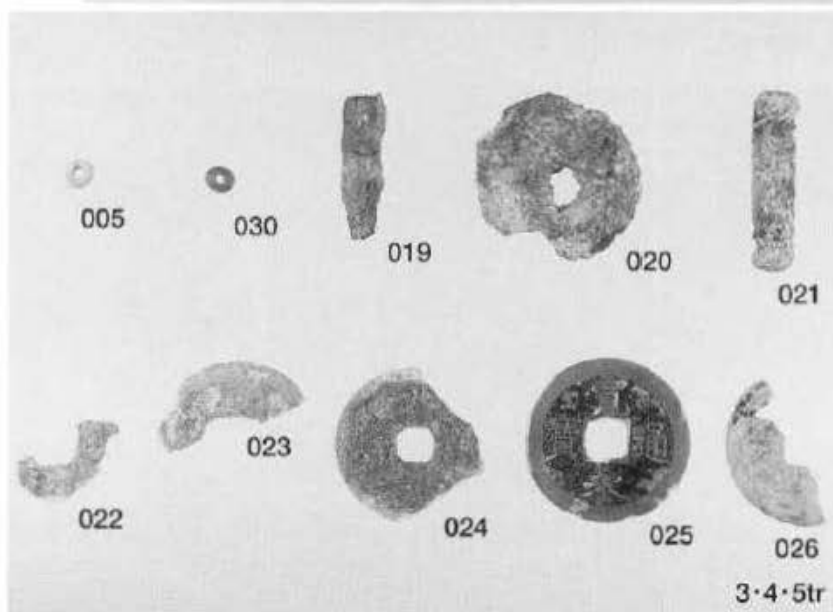
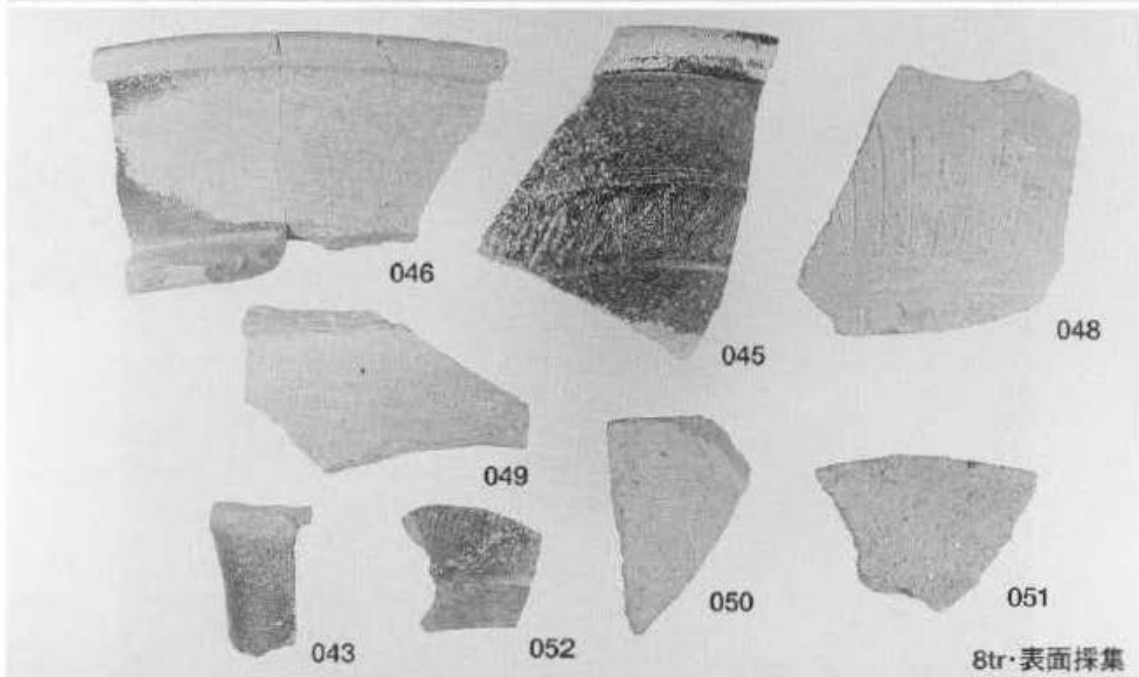
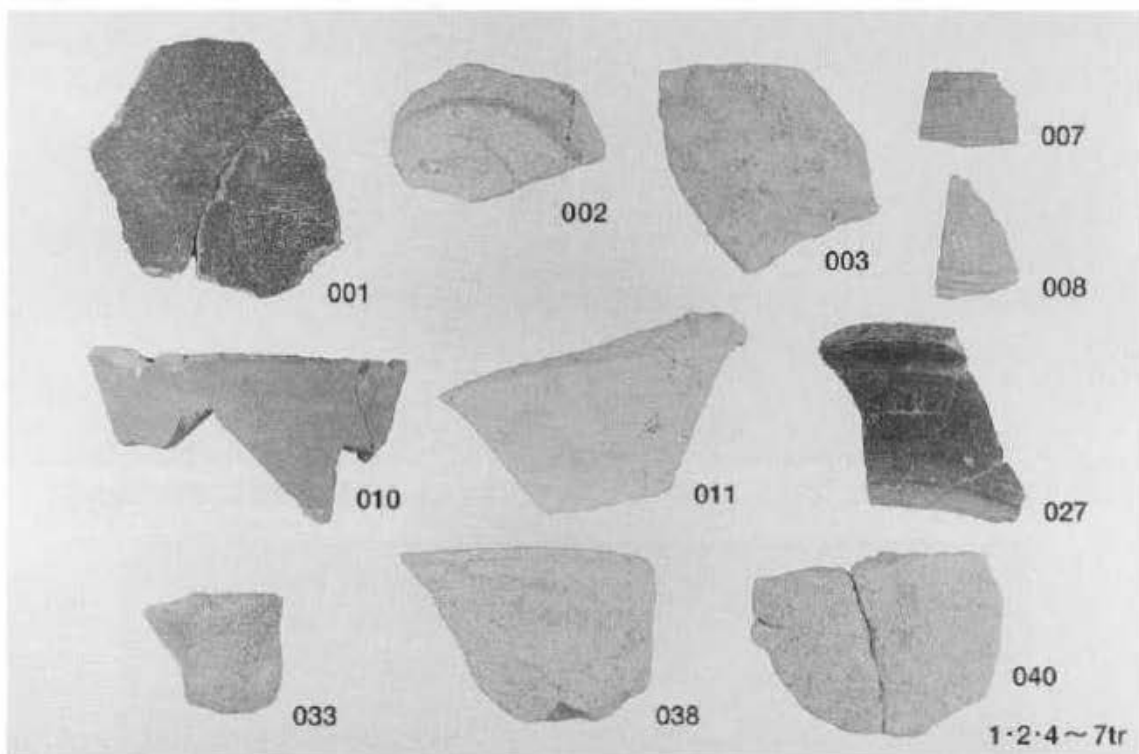
(3) 第8トレンチ完掘状況 (西から)



(4) 第8トレンチ遺物出土状況 (西から)



(5) 第8トレンチ北壁土層 (南から)



報告書抄録

フリガナ	サクラキョウコブン							
書名	桜京古墳							
副書名	福岡県宗像市牟田尻所在国指定史跡(装飾古墳)の発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	宗像市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第58集							
編著者名	白木英敏							
編集機関	宗像市教育委員会							
所在地	〒811-3492 福岡県宗像市東郷一丁目1番1号 TEL(0940)36-1540							
発行年月日	西暦2007年3月30日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	°,'"	°,'"		m ²	
サクラキョウコブン 桜京古墳	ムナカタシムタジリ 宗像市牟田尻 2019番地	40220	3320168	33° 50' 24"	130° 30' 08"	2003年8月1日～ 2005年1月31日 (現地調査)	893m ² (指定面積) 約52m ² (トレンチ面積)	史跡内容の 確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
桜京古墳	墳墓	古墳時代 後期	墳形・墳丘規模確認 主体部2基			前方後円墳(39m) 装飾古墳(三角文・沈線)		

桜 京 古 墳

宗像市文化財調査報告書 第58集

平成19年3月30日

発行 宗像市教育委員会

福岡県宗像市東郷一丁目1番1号

印刷 大成印刷株式会社

福岡市博多区東那珂3丁目6番62号